

# 女帝と道化の時代

——ロシア民衆文化における  
あるイタリア人音楽家のメタモルフォーゼ

坂内徳明

## 目 次

### はじめに

#### I. 問題設定

1. 「ビョートルのいないロシア」
2. イタリア文化とロシア

#### II. ピエトロ・ミーラの生涯

1. ロシア来訪
2. イタリアからのロシア巡業
3. 宮廷道化師誕生
4. 女帝の死

#### III. ロシアのペドリーロ

1. 名前
2. 『逸話集』から
  - a. ビロン様
  - b. 高位者への毒舌
  - c. 芸術家・知識人糾弾
  - d. 守銭奴か？
  - e. 名言・名答
  - f. 道化師の誇り
3. 民衆版画の中で
4. 妻たること
  - a. 道化師の妻たち
  - b. ペドリーロの妻
  - c. 女性の中のアンナ

#### IV. ペドリーロの時代

1. 文化史から見たアンナ期
2. ナロードの文化へのまなざし

はじめに

18世紀半ばの作という一葉のロシアの風俗版画（ルボーク）がある（図1）。縦36、横29センチメートルの木版画だが、絵師、彫師、摺師のいずれの名前も、ルボークの慣例として定かではない。絵の中央に、笛を吹いて四足動物に乗る人物の堂々としたグロテスクとも見える風体ならびに顔つき、派手な衣装、全体の構図、題材と文字の配置、赤を基調とした原色中心の鮮やかな色調—それらのどれもが目にする者の視線を惹きつけて離さない。ルボークが20世紀初頭に起こったロシア・アヴァンギャルド運動のみならず、民衆芸術も含めた現代芸術全体の在り方と方向性に大きな影響を与えたことを納得させるに十分な作品である<sup>(1)</sup>。左上部の添え文は、描かれた主人公の科白である。曰く、

おいらは貧しき若者で 鼻は立派な鉤鼻 赤鼻のファルノスが名前  
三日三晩飲みあかし 踊りの靴に足入れて 羽付き帽子をちょいと被り  
ズボンいっぱい尻をひって すっかりおめかしでお出かけだい  
跨る豚はワイン色 おいらの豚  
はうなり続け 餌をくんくん嗅ぎまわる

以下は、この一枚の版画を契機として、18世紀前半におけるロシア文化のあり様と展開をめぐる筆者の中に呼び起こされた一つの「像」（Bild）を素描したものである。



図1



## I. 問題設定

### 1. 「ピョートルのいないロシア」

18世紀初頭以降、モスクワ・ルーシの西欧化・近代化は、ピョートル大帝による国家的・政治的・経済的・社会的大改革の実現であったばかりでなく、中世的世界観を近世の世界感覚、新たな世界像へと転換するための文化戦略の選択であり、その意味である種の「文化革命」<sup>(2)</sup>であった。この文化革命は、西欧文化の幾多の成果の受容と浸透、ならびにそのアカルチュレーション（文化変容）によってもたらされたものであり、その過程はすでにピョートル期以前に準備・開始されていたと考えられる<sup>(3)</sup>。そして、この新しい時代とその文化の創出のために大きな契機となったのは、ピョートル大帝の社会改造プログラムと文化戦略だけでなかった。1697-98年に実現された「グレート・ジャーニイ」が象徴する西欧の多様な見聞と体験もまた、新国家の文化的認識の形成に決定的と言える意義を持つこととなった。その大遠征<sup>(4)</sup>は、ピョートル一行による歴史上のエピソードではなく、帝国の成立と、グローバリゼーションへの参画（「世界史におけるロシア・モメント」<sup>(5)</sup>）を高らかに宣言する現実的かつ象徴的な意味を持つ一大事件となったのである。

しかも、重要なことは、ピョートル期に本格化した「文化革命」が宮廷に代表される社会上層部のみではなく、庶民レベルでも実現されたことである（筆者は、宮廷文化と民衆文化は、表層的に見れば、その機能も方向性もまったく正反対で好対照を成しているとはいえ、両者の間には、ある種の構造的同質性を見出すことができると考えている<sup>(6)</sup>。近世・近代におけるロシアの社会と文化を総体として考える場合、宮廷文化（上層）と民衆文化（下層）の「隔絶」は、実体として指摘することは十分可能である反面、この「隔絶」自体を対象化し、両者の間に生じた「衝突」「連携」と「相互浸透」、あるいは双方に通底する基層的な部分を視野に収め、それを認識しようとしなければロシア文化史は構想しえないからである。そ

の意味から、以下で具体的に論じる時代ならびに事象は、この仮説を論証するために選ばれたものである).

ピョートル自身は皇帝指名による帝位継承を定めたにもかかわらず、後継者を明確に指名せず、彼は1725年1月に急死した。その後に合計4人の女帝(摂政を含めるならば5人)が誕生し、彼女たちが合計して18世紀百年の三分の二もの期間にわたり、帝国支配の頂点に立ったことの意味は大きく、そして根深い<sup>(7)</sup>。その中でも特に筆者が注目するのはピョートル死後の18世紀の前半、なかんずく、エリザヴェータ、エカテリーナ二世による統治下の「安定」した体制へと向かう以前の「転換」ないし「混乱」の時期、具体的に言えば、1730—1740年に皇帝の座にあったアンナ帝の治世期である。もとより、アンナ個人のキャラクターならびにその政治・社会的仕業に関心を集中させるつもりはない。ピョートル期からピョートル以後へ、前者から後者への「継承」、あるいは両者間の「断絶」にこそ、まさに誕生しつつあるロシア社会と文化の諸相が窺えるのではないかと思うからである。

冒頭に掲げた版画(ルボーク)も、そうした大きな変革期の時代精神と風俗を鮮やかに切り取って見せたものであることは、以下の記述によって明らかになるだろう。

#### 注

- (1) この作品ならびにルボークの全体像については、坂内徳明、2006aを参照。
- (2) Cracraft, 2003を参照。文化レベルでのピョートル「改革」についてはКраснобаев, 1983を「古典」として、近代ロシア文章語史をピョートルの「言語改革」に起点を置こうとするЖивов, 1996やУспенский, 1985らの仕事、文化改革者としてのピョートルとその時代に焦点をあてた近年の研究成果のアンソロジーПетр Великий, 2007(アニーシモフ編、上記のクラクラフト、ジヴォフの論文を収録)を参照のこと。
- (3) その過程はПанченко, 1982ならびにЧерная, 1999によって鮮やかに記述されている。
- (4) ピョートル一団の大旅行に関する最新の研究成果は、Гузевич Д. Ю. и

Гузевич И. Д. Великое посольство. СПб., 2008 に見ることができる。

(5) Рое, 2003.

(6) そのことは、別の面から見れば、文化レベルでの「ダイグロシア」(Успенский, 1985) — 例示として言えば、西欧語(古典ならびに現代語)とロシア語、宮廷語と民衆語、書き言葉(教会スラヴ語ならびに西欧語)と話し言葉、聖なる言語と俗なる言語等々の二言語変種併用一状態と呼べるものである。文化的「ダイグロシア」に関しては、Панченко, 1984, с. 118 にも指摘がある。この観点からすれば、マルク・ラエフの以下にあげるシェーマとそれを支えるモデルには大きな疑問が残る。彼によれば、18 世紀に入っても民衆文化はピョートルの変革にほとんど関わることなく、17 世紀の伝統的な要素を保ちつづけ、エリートの高等文化と民衆文化を隔てる深淵がいっそう深く掘られただけでなく、「民衆文化は硬直し、無気力にみまわれ麻痺した」という(ラエフ, 2001, p. 55, 80, 85-86)。ソビエト期において実証主義的に展開されてきた文化史研究を再考(例えば、17 世紀文学思潮における「デモクラチック文学」といった言説の学説史的意義の再検討)し、17-18 世紀における民衆文化そのもののとらえ直しと、宮廷文化と民衆文化の関係性を統合的かつ構造的にとらえる視点に立つべきと考える。

(7) Анисимов, 1997; Чиждова, 2002.

## 2. イタリア文化とロシア

ところで、18 世紀初頭に成立した新帝国のロシア文化の形成と展開にとって、イタリア文化が果たした役割はきわめて大きなものがある。むしろ、西欧列強のオランダ、フランス、ドイツ、イギリス、さらにはスウェーデン等々のヨーロッパ文化がもたらした影響の大きさは絶大であり、しかも、イタリアに関して言えば、ピョートル自身はこのイタリアを訪問し、自分の目で見聞することができなかった(周知のとおり、ウィーンからヴェネチアへ向かう途中、ロシア国内での銃兵隊の反乱の報を受けて急遽帰国した)。さらに、すでにモスクワ公国時代にもクレムリン内の寺院の建築等にイタリア人が深く関わった(ルドルフォ・フィオラヴァンティ、アレヴィシオ・ノーヴィイ他)にもかかわらず、18 世紀初頭以降の新帝国な

らびに帝都の誕生と確立にとって、イタリアならびにスイス（北イタリア）の文化が与えた影響は決定的であり、それなしにピョートル期の「文化革命」は実現しえなかったと言っても過言でない。

そのことは、ドメニコ・トレジーニ、ニコラ・ミケティ、ガエタノ・キヤヴェリ、ラストレリ父子、アントニオ・リナルディ等の名前と活躍を思い出せば十分納得できるであろう。西欧グローバリゼーションへの参加の意思表示をした17世紀末—18世紀初頭の「辺境」ロシアにとって、西欧文化の源流としてのイタリアは無限の魅力を秘めた土地に見えたに違いない<sup>(8)</sup>。その意



図2

味からしても、サンクト・ペテルブルグが「北のヴェネチア」と名付けられたのは偶然ではない。その命名は、新たな首都がイタリア都市をモデルとしてロシアに与えた文化史的意義の大きさを示すだけでなく、新帝都の「神話」誕生を高らかに予言するものだったからである<sup>(9)</sup>。

先に述べたことを繰り返すならば、「文化革命」は宮廷に代表される社会上層部のみではなく、庶民レベルでも実現され、イタリア文化の数多くの新奇な事象も宮廷から庶民へと急速に広まっていった。具体的に言えば、ロシアを訪問した外国人の活躍とその記憶は、貴族のみならず庶民の間で、すなわち社会全体の中で盛んに語り伝えられたのである。ただでさえ好奇心に充ち満ちていて、かつ、ピョートル期以前は実質的な「鎖国」状態にあったと言えるロシア（より正確にはルーシ）の人々であったからこそ、異郷からの来訪者とその所作が多くの話題を提供したことは、まぎれもない事実である。さらに言えば、ロシアへ渡来した人々の、興味深い言動をめぐる多くの情報が流布し、それが深く「フォークロア化」していった事

実は、ロシア自身の社会的意識ならびに文化認識の形成の上で大きな契機となったと考えられる。

以上あげたいいくつかの仮説を、あるイタリア人のロシア滞在を事例として検証することが本稿の目的である。

#### 注

- (8) 18世紀以前にも、例えば15世紀にモスクワを訪れたヴェネチア使節アンブローゾ・コンタリーニや、同じくヴェネチアの商人で外交官ヨサファト・バルバロによる貴重な記述がある。また、18世紀半ば以降にイタリアで学んだ多くの画家の名の長大なリスト、イタリアを文字通り崇拝したロシアの作家たち（H・B・ゴーゴリからA・A・ブローク、O・Θ・マンデリシュタム、И・А・プロツキイへ至る）を想起。美術史家のアンドロソフによれば、1730年代にはイタリアの注目すべき画家は誰ひとりとしてロシアへ招待されなかったが、イタリアで画業を学んだニキーチン兄弟はシベリア送りとなったし、ローマで約5年も学んだП・М・エロープキンは処刑されている。それでも、有名なアンナ女帝の肖像画（図2）を描いたのはイタリア人画家のヤコボ・アミゴニ（ジャコモ・アミコニ、1685-1752）であり、これはA・Д・カンテミールからロンドンで受けた注文（1732-38）にもとづく。この肖像画ならびにアミゴニの作品、彼とカンテミールとの緊密な関係については、Андросов, 2003に詳しい。
- (9) 「ベテルブルグの神話化」、特に「文学的神話としてのピーテル」に関しては膨大な文献があるが、その中でもっとも基本的な仕事はH・П・アンツィーフエロフとB・H・トポロフであろう。近年の成果としてР. Николози, Петербургский панегирик 18 века. Миф-идеология-риторика. М., 2009（原文ドイツ語）は周到な論考である。

## II. ピエトロ・ミーラの生涯

### 1. ロシア来訪

18世紀のロシアとイタリアの文化交流史の最初のページを開き、かつ宮廷ならびに民衆の双方で新たな文化を体現した代表的人物の一人として、イタリア人音楽家ピエトロ＝ミーラ・ペトリーオの名前をあげることがで

きる。彼の生涯は多くの謎に包まれ、それに関する資料も多くないが、可能な範囲で彼のバイオグラフィを記してみたい。

ピエトロ＝ミーラ・ペトリーロは、ナポリ北東に位置するモンテスカリオーズに、貧しい彫刻家の父アリビアーゴ・ペトリーロとマリヤ＝テレジアの息子として生まれた<sup>(10)</sup>。正確な生年は不明だが、1700年頃という。その後は、1725年にトスカナ地方のルッカにあったパラティーノ・カペラ（王宮聖歌隊）にバイオリニストとして入学したことがわかるのみである。ただ一点、注目すべきこととして、彼にはすでにイタリア時代に「美人の妻」がいて、彼女はスペイン人の船乗りと駆け落ちしたことが、あくまでも噂のレベルにおいてだが、知られている。ミーラの妻に関しては、後にロシアで人口に膾炙することとなる。

彼がロシアにやってきたのはいつか、これも正確に確定することができない<sup>(11)</sup>。しかし、皇帝（アンナ）命令書の中に「イタリアから来たイタリア人音楽家、10月1日から本年（1732年のこと—引用者）1日（他の文書によれば、1月1日—同前）までの支払をおこなう者」の中に彼の名前があり、また、「新たに契約したイタリア人音楽家は、去る732年に皇帝陛下令により以下のとおり決定された、1733年1月1日からの年俸としてピョートル・ミーロに700ルーブリ、ヤハン・パラツィジイに500ルーブリ」<sup>(12)</sup>と書かれていることから、ミーラは1731年末にはロシアに滞在していたと判断してよい。もっとも、ロシアに来た最初のイタリア人音楽家は彼ではなかった。17世紀後半にはイタリアからの巡業が行われていたし、1720年代のピョートル期にもその記録がある。その意味では、当時のロシアはイタリアからの演劇・音楽をすでに受け入れていた。ただし、それらはいずれも「断片的」で、エピソード的であり、偶然的な色彩が強いことが否めない。やはり、1730年代以降、イタリアの音楽家や演劇人が一団となって、しかも複数回にわたってロシアを訪れたことは大きな社会的事件となり、時代を画すことになるのである<sup>(13)</sup>。しかも後述のとおり、ミーラ自身が音楽家・役者として活躍しただけでなく、巡業する

芸人の選抜にも関わったことから見て、彼はイタリア芸人によるロシア興行が本格化していく時代を象徴する人物である。

注

- (10) 彼の生涯と活動に関しては、Храневич, 1902; Шубинский, 1908; Бутир и Порфильева, 1998 を参照した。インターネット上にも多くの情報が見られるが（明らかに 19 世紀後半以降のものと思われる肖像写真まで掲載されている！）、その典拠から見ても確実な情報はきわめて少ない。
- (11) И・И・ゴリコフが著わした『ピョートル大帝の偉業』の中にある「道化師 Педриелл」の記載を根拠に、ペトリーロはすでに 1700 年にはロシアで宮廷道化師となっていた、その後一度はイタリアへ帰国し、1731-32 年に再度ロシアへ巡業して来たという説（Бердников, 2009, с. 109-110）があるが、根拠を得るには他の資料がまったくないことから、ここでは採らない。
- (12) Старикова, 1995; Бутир и Порфильева, 1998.
- (13) 優れた演劇史家である В. Н. Перец ならびに В. Н. Всеволодский-Гернгросс によって 20 世紀初頭から 1920 年代までに行われた実証研究が今なお貴重な資料として貴重である。近年、それらを継承しながらも、より綿密な研究を展開した Л. М. Старикова の一連の仕事は画期的な成果として注目すべきである。

## 2. イタリアからのロシア巡業

ミーラが訪れた当時のロシアは、アンナ・イオアンノヴナの治世下にあった。ロシアにおけるミーラの成功と名声は、アンナと深く結びつくこととなる。

ロシア史上で二人目の女帝のアンナ・イオアンノヴナは、ツァーリであるイヴァン（5 世）・アレクセーエヴィチとプラスコーヴィヤ・フョードロヴナの四女として 1693 年にモスクワで生まれた。1710 年、叔父ピョートルのバルト地域を帝国・ロシア化しようとする政略にもとづき、クールラント公フリードリヒ・ウィルヘルムに嫁ぐが（婚礼は、同年 10 月 31 日、ピョートルの最大の寵臣メンシコフの邸宅において、小人の婚礼との合同







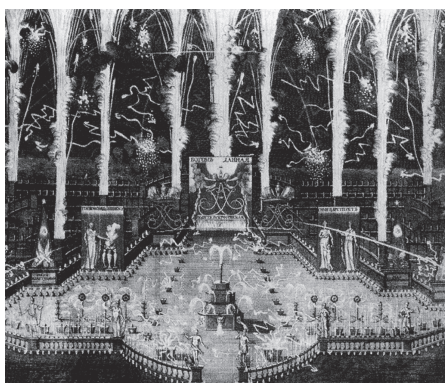


图 4

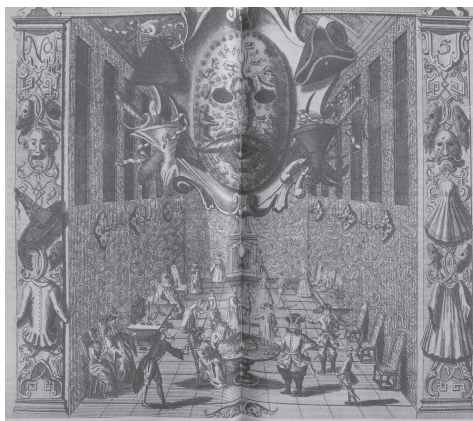


图 5



图 6

5). 例えば、1730年4月末から5月初頭にかけて行われた彼女の即位式典には、いち早くペルシャのアクロバット芸人が参加し、綱渡りを披露した。さらにより多くの演劇を所望した彼女は、ザクセン選帝侯でポーランド王のアウグスト2世に芸人を派遣するよう要請し、その命を受けて、在モスクワのサクソン王の代理人レフォルトとポーランド王付きロシア宮廷代理人ヴァイスバッハの両使節間で外国音楽家と役者招待に関する話し合いが開始されている。

その結果、1731年2月15日、イタリアの一座がドレスデンからモスクワに到着した。国家間の話し合いを前提とした公式のロシア興行は、これを皮切りとして三回、1731、1733—34、1735年に実現することとなる。第一回の1731年巡業の一团は総勢22人、コメディア・デラルテのアンサンブル(図6、7)と音楽家ならびに歌手からなっていたが、その中には著名な作曲家アルベルト・リストーリ、その父親で、アルレッキーノとパンタローネ役の喜劇俳優トマーズ・リストーリ、さらに男女道化役を演じる俳優たちがいたが、ミーラの名前はそのリストには見出すことができない<sup>(17)</sup>。1731年3月9日にこの一座は第一回の喜劇公演を行い、それには音楽インテルメッツォも含まれていたほか、イタリア語の科白が理解されなかったことからパントマイムとなった。また、当時、常設の劇場がなかったためリストーリは移動舞台を設営しなければならなかった(バルトロメオ・ラストレッリが協力)。この一座のロシア滞在は1731年2月から1732年初頭までとされるが、その後はメンバーの大部分がドレスデンへ戻ったという。彼らへの報酬として全体で3000ルーブリを与えるようにとの指示(1731年12月31日付け書簡)の中で挙がっている音楽家と芸人のメンバー17名の中にもミーラの名はない<sup>(18)</sup>。18世紀演劇史に関する多数の未刊資料を公刊したことで知られるJ・M・スタリコヴァの秀逸な資料集によれば、ミーラの名前を見出すことができるのは、1732年の「宮中官房書」ならびに「宮中官房指令」(7月10日付け、レーヴェンヴォリデ公爵名)においてである。その内容は先述のアンナの命令書と合



図 7



図 8

致しており、1733 年からの雇用が決定されたことになる。さらに上記文書の後者によれば、「女帝陛下は自らの名前の命により以下のとおり命じられた、イタリアから来た音楽家ペトロ・ミーロ、ヨハン・パラツィジを自身の宮中での勤務のために一年間受け入れること・(略)・その報酬としてイタリアから勤務にきた時期から半年分、すなわち今年 1732 年 4 月 1 日から 10 月 1 日までの分を与えること」<sup>(19)</sup>とあることから考えると、1732 年の前半、あるいは初めに彼はロシアに来ていたと考えて間違いない。

ロシアに来た第二番目の一座は、ヴェネチアで選抜され、27 名から 35 名で構成されていた。1733 年春か夏に首都ペテルブルグに到着し、約二年間滞在、1733 年には 14 つの喜劇と 3 つの音楽インテルメディアを、翌 1734 年には 4 つの喜劇と 1 つの悲劇を上演したが、この一座のメンバーの中に、バイオリニストのルイージ・マドニス、その兄弟でバイオリニストかつフレンチホルン奏者のアントニオと並んでピエトロ・ミーラの名がある。1736 年夏にペテルブルグを訪問したデンマークの学者 P・フォン・ハーヴェンの記述によれば、当時、女帝の下には、カストラートのドレーエル兄弟あるいはカストラートのピエトロ・モリージ、女性歌手 P・

ルヴィネッティを含めて約 70 名のイタリア人歌手の一団がいたという<sup>(20)</sup>。

ヨーロッパからロシアへ来た宮廷楽師の一覧によれば、ミーラは 1733 年から 1740 年まで 700 ルーブリの年俸を与えられ、これに、時に応じてさまざまな俸給が上乘せされた、例えば 1737 年には「屋敷建設のために」500 ルーブリを彼は受け取ったという。彼はバイオリン奏者だけでなく、作曲家ならびに演出家として、さらには俳優として、例えば 1734 年 5 月には「アルレキーノ誕生の喜劇」に出演している。言うまでもなく、このアルレキーノはイタリアのコメディ・デラルテに欠かせぬ主人公の一人だが、ここにあげた出し物もロシア宮廷でも繰り返し上演された定番である<sup>(21)</sup>。また、アルレキーノは、ロシアではガーエル *raep* という名前となり、ロシアの寸劇ヤルボークの人物として（「ガーエルのインテルメディア」「ガーエルの結婚」「ガーエルと仲人」等）盛んに登場した。アルレキーノとほとんど混同されて同じものとされた感のあるガーエルという語の起源がドイツ語 *Geiger* に遡ることに加えて、もともとペドリーロがバイオリン奏者であったことを考えると、すでにこの時点で、彼がロシアのアルレキーノと化していく過程が予見されるはずである。

彼はまた、演劇公演の興行師ならびに組織者として働いた。1734 年に彼は、宮廷カストラートの兄弟でオーボエ奏者の D・ドレイエルとともに故国イタリアへ送られたが、それは、オペラ＝バレ団のダンサーを雇用するためであり、彼の仲介で多くの歌手がロシアへやってきた。これについて証言するのは、ドイツ人でロシア最初の芸術史研究者となったヤコプ・シュテリンである、「……ペトリーロは、まだ室内楽師であった 1734 年に、イタリアオペラと宮廷カペラとの協議を行い、宮廷室内音楽を完璧なものとするべく能力ある、必要な人物をイタリアで探すようにとの宮廷の依頼を受けた。翌年夏、彼はイタリアから戻ってきた」<sup>(22)</sup>。ミーラは、30 人を超えるイタリア人の素晴らしい一団をロシアに連れて来たが、その筆頭には、後にロシア最初の宮廷楽長となってロシア・オペラ文化の発展に大きく貢献した F・アライヤがいた（図 8、ただし、彼とミーラとの仲は

うまくいかなかった<sup>(23)</sup>。一行に参加していたのは、歌手の K・ジョルジ、F・ジョルジ、K・ピヤンタニダ、音楽家として D・ダロリド、J・ダドリド、J・ピヤンタニダ、それに 11 名の喜劇俳優と踊り手であった<sup>(24)</sup>。

加えて、ミーラを介して宝石や高価な布等の買い付けが行われることも度々あった。1735 年、ロシア宮廷はミーラを通じてトスカナのガストン・メヂチに対し、名高いトスカナの 139 カラットのダイヤモンド購入を手紙で申し出たが、うまくいかなかった<sup>(25)</sup>。ミーラのある同時代人の証言によれば、ミーラは「バイオリン弾きと歌手と道化役者、そしてペテン師と酒場主人とを自分の中で幸福な形で一体化していた人物である<sup>(26)</sup>」。

#### 注

(14) 1730 年の「政変」に関する古典的研究は В. О. Ключевский と М. М. Богословский に始まり、Юхт, 1985 の第 4 章（阿部, 1996 第 2 部第 4 章）の他、回想録を集めた Безвременье, 1991, 近年の研究成果として Анисимов の一連の仕事を参照のこと。

(15) 「悪名」は、すでに彼の死の直後のエリザヴェータ帝期にきわめて政治的に作られていったが、彼の政治的能力の評価を別にしても、ピロン評価の底流に存在するのは、ピロンがバルト地域のドイツ人だったという二重の意味での反ロシア性を感じ取るナショナルな意識である。いわゆる「ピロン体制」бионовщина とは、一般的には「寵臣・側近（外国人・異民族）による悪政・恐怖政治」の代名詞とされることが多いが、ピロンが同時代の政治にどれほど実質的な影響をもたらしたか、については近年、議論があり、そのアクチュアリティや「神話性」も含めて再検討が求められる。ちなみに、『ソビエト歴史百科事典』（1962）には бионовщина の項目があるが、『祖国史事典、全五巻』（1994）にはない。『ロシア帝国史』（全 2 巻、1996）の著者 М・Я・ゲルレルは、この「クールラントのペテン師」（この表現はすでにクリュチェフスキイにある）を 19 世紀の аракчеевщина, 20 世紀の ежовщина と同列に置き、この三人には共に「社会を変えようとするプロジェクトがなかった」が、特にピロンは富と名誉と権力のみを求めた、とする（Геллер, 2001, с. 18）。ピロン「再考」のためには Анисимов, 2002 第 8 章「ロシア史の神話としての бионовщина」が参考になるが、さらに、ピロンの出身地であるクールラントの

トボス＝ローカリティと民族的背景を考慮しなければならない。

- (16) アンナ帝時期の娯楽と芝居の具体相については Старикова, 1988, その具体的資料は Старикова, 1995 に詳しい。また, Пезенти, 2008, с. 59-69 も参考になる。後者は, ロシアにおけるコメディア・デラルテ（インテルメディア）のレパートリーとそのシナリオの分析を目的とした優れたモノグラフだが, 17 世紀末から 18 世紀半ばまでのロシア演劇史の全体を手際よく概観している。
- (17) アンナ帝時代の演劇と見世物に関しては, Всеволодский-Гернгросс, 1913, 1936; Пезенти, 1997, 2008; Старикова, 1988, 1989, 1995.
- (18) Старикова, 1995, с. 210-211.
- (19) Старикова, 1995, с. 217-218.
- (20) Беспятых, 1997, с. 376.
- (21) Пезенти, 2008, с. 82-83.
- (22) Штелин, 2002, с. 105-106. Музыкальный, 1996-2002, Т. 1. Кн. 1.
- (23) アライヤに関しては, Музыкальный, 1996-2002, Т. 1. Кн. 1.
- (24) Штелин, 2002, с. 106-107.
- (25) この手紙（1736 年 1 月 13 日付け）は Старикова, 1995, с. 267-268 で読める。
- (26) Mooser R.-A. Annales de la musique et des musiciens en Russie au 18 siecle. Geneve, 1945. Старикова, 1995 による。

### 3. 宮廷道化師誕生

1736 年頃, 彼はアダムカ・ペドリーロの愛称とともに, 公式の宮廷道化師の称号を獲得している。年俸は 100 ルーブリであった。一説では, 上述のアライヤとの不和が原因で, ペドリーロは宮廷道化としてロシアに留まる決心をしたともいう。

歴史家のアニーシモフによれば, 道化師を探すことはアンナにとっては「きわめて真面目で重要な事業であった」<sup>(27)</sup>。当時, 宮廷内には 6 名の道化師が公認され, アンナ女帝や彼女の取巻きへのさまざまな奉仕をすべく侍っていた。その 6 名とは, ピョートル大帝期から宮廷にいた二名である И・Е・バラキレフとポルトガル生まれのユダヤ人ヤン・ダコスタ（ラコ



スタ), ロシア貴族 H・Φ・ヴォルコンスキイ公爵, M・A・ゴリツィン公爵, A・Π・アブラクシン伯爵の三名, そして我がペドリーロである。内訳はロシア人4名(内3名が公爵)と外国人2名であり, 貴族と外国人が道化師に「任命」(懲罰としての格下げも含めて)されたことは注目しなければならない。その際, Π・И・ベルドニコフが的確に指摘するとおり, 3名が貴族の称号を持ち, バラキレフとラコスタがピョートル時代からの道化師であることからすれば, ペドリーロだけが「自らの意志で, いわば魂を売るという自身の声で道化師になった」<sup>(28)</sup>ことが重要である。この道化師たちの妻が時代の大きなテーマとなること, そして妻も含めた彼らの信仰が問題化することに関しては, 後に詳しく述べる。

ロシアの道化師と道化の歴史は, すでにモスクワ・ルーシ時代に君主や大貴族たちを笑わせる才能ある人々が宮廷内にいたとはいえ<sup>(29)</sup>, ピョートル大帝の時代に始まったと考えてよい。周知のとおり, ピョートル期には宮廷に多くの公認の「馬鹿」がいて(小人を合わせると100人を数えたという。図9), 彼らは位階と身分を持っていた。アンナ・イオアンノヴナはこの伝統を引き継いだばかりか, それを大きく発展させた。すでに1710年冬の結婚式の場には, 約80名の朱儒が参加したことから始まり, 彼女の時代には, アニシモフによれば, 宮廷内に道化師を侍らせることが, 誕生直後の帝国にとって欠かせぬ「国家的笑いの制度」となっていた。アンナは道化師たちの喧嘩や小競り合いをことさら気に入っていた。Γ・P・デルジャーヴィンは, アンナの同時代人が語った話を回想しているが, それによれば, 女帝は道化師たちを整列させて, ぶつからせ, 挙句の果てには喧嘩や殴り合いとなるといった混乱の様を見ては大笑いをし, そのことがさらに宮廷中の笑いを誘っていたという(図10)。

ミーラは女帝の絶大な信頼を勝ち得ていた。宮廷内の宴会では, いつもペドリーロにはアンナの代わりにトランプゲームをし, 負けた場合の支払いをすることが許されていたし, 通常の夜会ではつねに女帝のトランプのパートナーとなっていた。





図 9



図 10

1735—36年に半年間余りペテルブルグに滞在したスウェーデン人の学者ベルクは、宮廷の生活と宮廷の道化師について次のように記している。

宮廷では毎週二回、日曜日と木曜日に、外国の大臣、将官クラス、そして宮廷人たちが公式訪問を行う。時間は交際に費やされるが、宮廷中枢は秩序正しくきちんとしている。女帝陛下はピケットかビリヤードに興じるが、時に、トランプ台のあたりをめぐるか、宮廷道化師のペドリーロと戯れている<sup>(30)</sup>。

さらに、

午餐の後、女帝陛下は短時間の仮眠を取り、セニョール・ペドリーロとしばし遊び興じている<sup>(31)</sup>。

ベルクによれば、1735年のキリスト降誕祭前にペドリーロと、すでにピョートル大帝期に宮中にいて「サモエード王」の称号をもらっていたラコスタは新たに勲章を与えられたが、それは、赤いエナメルで覆われ、まわりに磨かれた小さな宝石のついた聖ベネヂクト勲章<sup>(32)</sup>であった。

注

(27) Анисимов, 2002, с. 80. 彼は、ペドリーロが宮廷道化師になったのを 1733 年頃としている。

(28) Бердников, 2009, с. 110. アンナ（ピョートル）宮廷内の道化師として貴族ならびに外国人が選ばれたことに注目するスタリコヴァは、その理由を、彼らが奇（畸）人であったことに求めている（Старикова, 2000, с. 105）。

(29) Чохлауэ-Вовфは、ロシアの道化師のルーツを 17 世紀前半の外国人（アダム・オレアリウス）の記述に登場する街頭を駆け巡る芸人 халдей に見る一方で、それがロシア中世以来の人形芝居のヒーローたるペトルーシユカの表象に大きな影響を与えたとしている（Тихонравов, 1861, с. 57）。Фаминцын, 1889; Ровинский, 1881 も基本的には、ロシアの道化師を、

中世以来の土着の芸人の伝統と17世紀以降にロシアへやってきた外来の芸人・道化との「相克」の枠でとらえようとする点では同じである。ロシア道化史を概観するものとしては、Бердников, 2009 が手頃である。

(30) Беспятых, 1997, с. 155.

(31) Беспятых, 1997, с. 160.

(32) ロシアの正規の勲章としては登録されていないこの勲章は、その形から聖アレクサンドル・ネフスキイ勲章（聖アンドレイ・ピエルヴォズヴァンヌイ勲章に告ぐ第二番目の勲章で1725年に制定、「縁取りなしの赤い綬に繋がれた十字章と8つの先端を持つ銀製の星章」）に似ていたとされる。この勲章と勲章授与の政治性・宗教性については Успенский, 1990, с. 233-234.

#### 4. 女帝の死

ロシアにおけるペドリーロの活躍はアンナ・イオアンノヴナ女帝個人ならびにその時代と深く結びついていた。フランス人とドイツ人のハーフであるJ・C・トレメールは、喜劇役者としてヨーロッパの宮廷を巡り、ロシアではB・K・ミニフの庇護下でペテルブルグに滞在し、一年余り(1734年9月から1736年2月まで)、宮廷での「遊戯」に参加した人物だが、彼の手になる書簡形式の戯れ歌では、ロシアにおけるペドリーロの肩書きは次のように記されている、「サモエード王位請求者、シカの副県知事、ゴフラントの即決司令官、十二宮ヤギ座の予定者、ロシアで一番の馬鹿者にして有名なバイオリニスト、聖ベネズクト勲章の栄えある臆病者」<sup>(33)</sup>——長いタイトルに、皮肉と笑いが込められていることは明らかである。

1739年から翌年にかけての厳しい冬の時期にペテルブルグで、アンナ帝の命により、「氷の家」あるいは「氷の宮殿」と呼ばれる祭りが開催された。それは、市内中央を流れるネヴァ川氷上、海軍省の要塞と冬宮の間の場所に氷の宮殿を建て、そこで一つの結婚式を挙行し、仮装行列を交えながらその光景を見学するという変わった趣向によるものである。祭典全体

の指揮者は官房長官の A・II・ヴォルインスキイ、発案者は宮中侍従長の A・Д・タチーシチェフ、設計は建築家として知られる II・M・エロープキンが行い、氷の家のスタイルはイタリアの後期ルネサンスの著名な建築家アンドレア・パラジオによるものとされた(図 11)。氷の家そのものは 1740 年 1 月初頭に完成していたが、祭りが最高潮を迎えたのは 2 月の謝肉祭週間である。それは、上述の 6 名の道化師の一人である M・A・グリツィン公爵とアンナのもとにいたカルムイク人女性 E・II・ブジェニノヴァとの結婚式と最初の一夜の場面が仮装行列の一行に披露されたからである。ただし、いかにも奇妙なこの祭りを皇帝の気まぐれによる、たんなるエピソードとしてのみ理解するのは不十分である。後に述べるとおり、そこには、ある種の宗教紛争的な意味合いが込められていただけでなく、多

民族から成る帝国をパロディと遊戯を通じて国内外に確認させようとする意図が秘められていたからである。氷の家の祭典は「勝利にあふれたロシア国家に対する演劇化された独自の賛歌」であり、「ロシアの権力が皇帝の掌中にあることを誇示する」<sup>(34)</sup>ものとならなければならなかった。

ロシアにおけるマスカレード(仮面仮装演)の歴史もピョートル大帝期に開始し、彼の治世下ですでに重要な文化的出来事となっていた。この習慣は継続され、

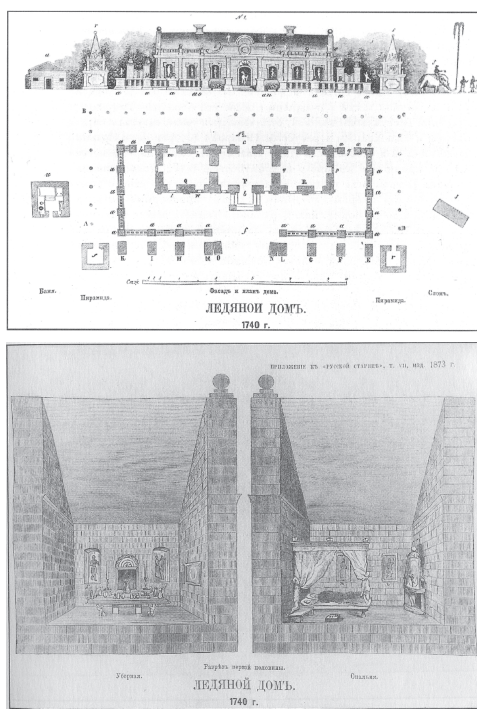


図 11

アンナ帝の時代に発達し、大きく成長したのであり、彼女の治世の最初から最後までそれは宮廷習俗には不可欠のものとなった。そのことと関連して重要なことは、マスカレードに対するアンナの熱狂ぶりの理由が、「偉大な叔父」を真似てそれを継承することだけにあったのではなく、西欧の祭典に対する彼女自身の強い興味にあったことである。優れた演劇史家 J・M・スタリコヴァの、きわめて正確な指摘によれば、すでに 1731 年の最初のマスカレードには、「包み隠しようもない西欧へのあこがれのまなざし、イタリアへの明確なオリエンテーション、特にヴェネチアのカーニヴァルへの志向が感じ取れた」<sup>(35)</sup>からである。

もっとも、「氷の家」の祭典でペドリーロがいかなる役目を果たしていたのか、正確に伝える資料がないのは多少残念である。

1740 年 10 月 17 日、治世から 10 年でアンナ女帝が逝去した。彼女の死後直ちに、彼女の姪でイヴァン 6 世の母親のアンナ・レオポルドヴナが権力を持ち、わずか 22 日間の摂政職にあったピロンを追放したばかりか、宮廷から道化師たちを追い出した。12 月 17 日の政令（ちなみに、アンナ女帝の埋葬は 12 月 23 日）によってミーラは解雇され、祖国への帰還を余儀なくされた。だが、もはや彼にとり、アンナなしのロシアはまったく意味がなく、住むべき場所が今やどこにもなかったことは言うまでもない。

ロシアを後にしたミーラの生涯に関する情報はきわめて少ない。有名な回想録の作者である J・カザノヴァによれば、ミーラは 1743 年にはヴェネチアに居たことになっている<sup>(36)</sup>。1747 年にはドレスデンでインテルメディアに出演していたこと、1775 年、彼はまたヴェネチアにいたことが知られている。そして、おそらく 1782 年以後に、おそらくはここで死んだとされている。

注

(33) Ровинский, 2002 に引用された Troemer J. C. Die Avantures von Deutsch-Francos mit all sein Scriptures... Nurenberg, 1745. による。

(34) Старикова, 1995, с. 95. フェスティバル「氷の家」については、坂内徳明、

2011.

(35) Старикова, 1995, с. 95.

(36) 「……ロシア皇后（女帝の間違い—T. B.）の有名なお気に入りで、ペテルブルグから来たばかりペトリロさまと言った」この人物についてカザノヴァは記している、「わたしは、この男の名前だけを知っていたが、実際は、〈有名な〉という代わりに〈恥ずべき〉といったほうがふさわしく、〈お気に入り〉というよりは〈幫間〉といったほうがいい人物だった」（『カザノヴァ回想録 1』窪田般彌訳，河出書房新社文庫，1995 年）

### Ⅲ. ロシアのペドリーロ

このように、彼の十年足らずのロシア滞在をめぐる具体的事実で知られていることはさほど多くはない。にもかかわらず、同時代ならびにその後のロシア社会に残された「反響」は多く、社会的記憶という面から見た時、ペドリーロの存在はきわめて大きな意味を持ち続けていったと考えられる。ロシア社会の中で、彼をめぐる表象は様々に変形し、時に事実とはまったく異なる「歪んだ」ものになりながら、大きく展開されたのであり、ロシアを訪れたこのイタリア人音楽家の姿は、それまでの中世的・伝統的ロシア文化の記憶とも混交しつつ、「新時代」到来を実感していたロシアの人々に大きなインパクトをもたらしたのだった。そのことは、彼をめぐるさまざまなフォークロアによって見ることができるであろう。より具体的には、彼の名前そのものに始まり、多くの小話・噂話（アネクドート）の主人公として、さらに民衆版画（ルボーク）の登場人物としてである。

#### 1. 名前

この道化師はイタリアでの姓がペトリロー、名前がピエトロ＝ミーラであり、それらはロシアでさまざまに変形した。名前として、アダム、アダムカ、さらにアントニオ、アントニイ<sup>(37)</sup>も使用された他、ピエトロからピョートルが、さらにロシア人形劇のおなじみの主人公であるペトルーシユカも使われた。



18世紀ペテルブルグの、上は宮廷から庶民の風俗にいたる詳細な社会的記述を行った歴史家 П・Н・ペトロフによれば、18世紀に首都でこの道化師はクジマ・ペトロフ・ペドリーロと呼ばれていた<sup>(38)</sup>。指摘するまでもなく、ロシア人の名前には決して欠かすことができない父称のペトロフ（父親の名前がピョートルであることを示す）という部分が付け加えられたことから、彼がすでに「ロシア化」していたことがわかる。ミーラ、ミーロという名前はロシア人にとっては即座に мир という言葉を思わせ、これが「宇宙」「世界」「世間」そして「平和」といったきわめてポジティブな意味を有することも彼の名前の流布につながった要因の一つであろう。さらに、ペドリーロがペルデーロを連想させる<sup>(39)</sup>ことも重要である。

ペドリーロの他に、ペトリルロ（コメディア・デラルテの仮面、登場人物、図12）、ペトリロ、ペトリリーイ、ケドリーロ等も広く使われていた。ちなみに語尾「イーロ」《-ило》はロシア語に一般的で、「多産的な」指小・表愛形である。この語尾に対するロシア人の違和感は皆無であり、しかも大きな親しみを込めて聞くことができるはずである（民衆版画の滑稽な人物たちであるヴァヴィーロ、ダニエロを参照）。また、ペドリーロの名前は、19世紀後半にも上演されていた風刺劇「大食いのケドリル」とも結びつく<sup>(40)</sup>。道化師を大喰らいや呑み助として描くことは、17世紀風刺文学や口承文学、民衆版画の民衆的伝統の中で広く流布していた。

さらに、楽師、道化師と放浪芸人のイメージの混交により、ペドリーロはまたペトルーハ、ペトルーシュカとも呼ばれていた。言うまでもなく、ペトルーシュカはロシアの人形芝居の主人



図12



公の名前であり、また、人形劇そのものの名前でもあった。また、ファルノスという名前もペドリーロのあだ名として登場した。

ミーラの名前が多くの変種を有することは「民衆的ファンタジー」が広範に及んでいたことを示すものであり、この想像力は民衆語源の力により、それまで耳にしたこともない、新たな外国人の名前に意味を与え、自らのものとした。外国音楽家とロシアの放浪する大道芸人との「衝突」、ならびに民衆の人気を博した人物たちのグループの形成については、後に述べる。

#### 注

- (37) このアントニオの名前を使って、アントニ・ペドリーロなるイタリア人がピョートル大帝期の 1700 年にすでにロシアへ来ていたとするアネクドートもインターネット上にある。
- (38) Петров, 2004, с. 298.
- (39) Педрилло は Пердилло の子音の入れ替わりであり, пердить, пердеть は пукать, дыкать (放屁する) の意味。
- (40) ドストエフスキ『死の家の記録』にも登場するケドリルの名前は、ペドリーロの「訛った」形であろう。さらに、ケドリルがブランベウス王の使用人となるルボークも参照のこと。

## 2. 『逸話集』から

ペドリーロの生涯と活動に関しては、多くのアネクドット（ロシア語では力点のある母音をやや長めに発音することから、以下ではアネクドート<sup>(41)</sup>と表記する）と称される噂話・逸話が残し、語り伝えられている。このような小話は同時代人たちの間で広まって書き留められ、小話集やエピソード記事、さらには外国人のロシア宮廷見聞記など多くの資料に見出すことができる。それらの中でもっともまとまったものは、ペドリーロの名前を冠した一冊のアネクドート集（『アンナ・イオアンノヴナ女帝の宮廷ならびにピロン摂政時に道化師だったアダムカ・ペドリーロの賢く、機知とユーモアにあふれた面白アネクドート集』（1836 年刊行、第 1 部・23

話・37 ページ、第2部・27 話・47 ページ)<sup>(42)</sup>である。以下で、この資料集を中心としながら、宮廷内のあり様と風俗をきわめて鮮やかに映し出す小話をいくつかのグループに分けて検証してみる。

a. ビロン様

『面白アネクトート集』の冒頭を飾る小話は、本のタイトルにも明示されていたように、ビロンとの親密な関係を語るものである。

ビロン公は道化師ペドリー口の知恵、巧妙さと明敏な思いつき、そして仕事への熱意がとても気に入っていた。しかし、可愛がられていたにもかかわらず、一度ならぬモラルを逸した彼の考えは好まなかった。とうとうビロンはご立腹で、自分のところに入出入りするのを禁じ、仕事から遠ざけた。あるとき、しかるべく時間に自分の家の近くをビロンが通ることを知ったペドリー口は、その機会を利用しようとした。ビロンがやってきて見ると、ペドリー口の部屋に梯子が立てかけてある。髪を巻いた頭をペドリー口が窓から突き出したのを梯子に立った床屋が調髪し、髪粉をふっているではないか。ビロンは足を止め、ペドリー口、これはどうしたのか。私の床屋が私に腹を立てましたので、出入りを禁止しました。ですが、閣下、御覧のとおり、この者がいないと私は生きていけないのです。ビロンは笑ってペドリー口を許してやった。

[第1部第1話、以下1—1と表記]<sup>(43)</sup>

エルンスト＝イオガン・ビロンはクールラント公の廷臣の子弟として1690年に生まれ、アンナの寵臣としてクールラント時代を送る。アンナが女帝となっても彼女の文字通り片腕として宮廷を支配したが、彼女の死後に流刑され、中央政界から姿を消した。だが、彼が生まれ、アンナと過ごしたクールラントの土地では今なお存在感ある君主として記憶され



図 13

人物である（図 13）<sup>(44)</sup>。  
ペドリーロはビロンの絶対的ともいえる寵愛を受けていたし、受けなければならなかった。それを得るためにこそこのイタリア人は「お馬鹿」をし、言う必要があった。ビロンとペドリーロとの関わりを語る話は、1836 年刊の小話集の全体 50 話中の 9 話を数える。

ペドリーロはビロンを自宅へ招待する。客に行くこと、客として招き、供応すること（客人歓待 hospitality, гостеприимство）は、現代ロシアでも根強く残る重要な「エチケット」<sup>(45)</sup>である。

あるとき、ビロンがペドリーロのもとに客に行った。そこには素晴らしいご馳走が用意されていた。おいしい料理の数々にビロンはとても満足し、料理人にはたっぷりと褒美を与えた。食事が終わるとペドリーロはビロンに言った、「閣下、私をご馳走をした動物は今も生きております」ビロンはとても驚き、自分で確かめたくなった。ペドリーロがビロンを中庭へ連れて行くと、そこにはなんと、耳を切り落とされた豚の一群がいた。料理はすべて、豚の耳をさまざまに調理してこしらえたものだった。[1—2]

豚耳料理でビロンを供応し、しかも食後に生きている豚を見せるというペドリーロの趣向とアイディアはユニークであり、かつ驚きである。

ビロンに向けた欲望は執拗で限りがない。

ペドリーロは長い間、宮廷とビロンに仕えたので賄いを願うことを思いつき、ビロンのもとに行き、こう言った。閣下、私は退職しましたので収入がなく、貧しく、食べるものが何もありません。どうかご援助下さい。ビロンは賄いとして彼に 200 ルーブリを与えるよう命じた。しばらく経ってペドリーロが再度公のもとに現れた。賄いの追加を願うペドリーロの言葉を聞いて、ビロンは叫んだ、何だって、まだ不満なのか、お前には賄いを与えるよう命じたはずだ。それに答えていわく、ええ、閣下、私には飲むものが何もないことを申し上げるのを忘れておりました。ビロンは微笑んで、もう一度恵んでやった。[1—17]

ペーチに煙が充満しないように工夫することは大問題であった。

ビロンがペドリーロに、ペーチを煙から守るにはどうしたらよいかと相談すると答えは、最良の方法は煙突にユダヤ人を入れることです、よく知られているとおり、彼らはなんでも取ってきますから。[1—5]

アネクトートでは、ユダヤ人への素朴な民衆感情がむき出しとなる。  
次の小話は傑作。

ビロンがペドリーロに尋ねた、ロシアの人々は自分のことをどう考えているのだろうか。答えていわく、閣下、ある者はあなたのことを神と、ある者はサタンと見なしております。誰もヒトとは考えておりません。[1—20]<sup>(46)</sup>

いつの時代にも、どこでも、権力者たる者は民意を気にするものである。自分がアンナを「たぶらかして」ロシアを掌中に収めた！ 一異邦人たる自分はロシアの民にいかに見られているか、に神経をとがらせているピロ

ンに対する絶妙の答え。道化としての面目躍如である。ちなみに、ロシアの人々 **россияне** という言葉は、19世紀半ばにはごく普通の言葉となったが、そもそもは17世紀後半に活躍した啓蒙人シメオン・ポロツキイが使い始めた。

#### b. 高位者への毒舌

宮中に群がる貴族や役人等の高位の人々に対して、ペドリーロが辛辣な言葉を浴びせることは、宮廷内の習俗として当たり前の光景だった。その中でも、功なり名をあげた老兵が自分の自慢話と苦勞話を披露するのは、多く見られたはず。

將軍が、ペドリーロのいるところで、自分がトルコとの戦闘に参加したとき、空腹でたまらずに馬肉を食べたと語った。ペドリーロはそのことをとても哀れんだ。將軍がいかに嬉しそうに、ペドリーロが同情してくれたことに感謝すると言うと、彼いわく、そうではありません、將軍、私はかわいそうな馬に同情しているのです。[1—3]

動物との関係性を語るものは、ペドリーロにまつわる話に多くある（動物の「味方」、動物と人間の対比等。以下で述べる彼の妻に関する場合も参照のこと）。アンナ帝の時代のトルコとの戦争は1735年に始まり、1739年にベルゴロド講和が成立している。実は、1869年に刊行されたアネクトート集に収録された同種の小話では<sup>(47)</sup>、この將軍の名前は具体的に **А・И・Тараканов** 中將とされ、戦闘も1738年のクリミヤ遠征として語られている（具体的な固有名詞を聞き手・読み手の状況次第で明示したり、しなかったりすることは、アネクトートのみならず口承文学作品のテキストでは、常套の手法である）。ちなみに、タラカノフ家は起源を16世紀初頭まで遡ることができる貴族名門で、ここの中將アレクセイ・イヴァノヴィチは、元老院議員、スモレンスク県知事、陸軍省官僚を歴任し1754年

に死去した名将である。

家柄や血統の自慢に対する大いなる皮肉として、

名声を好む B 公爵はいつも自分の祖先について語り、その中には有名になった者が何人もいと語るのがくせだった。あるとき、ペドリーロはこう言い放った、祖先のことしか褒められない者は、地中に埋まっているのが最上なジャガイモと同じさ。[1—10]<sup>(48)</sup>

由緒正しい(?)公爵に面と向かって、お前はジャガイモ! と言っている道化師の姿は見事である。ただ、ロシアにおけるジャガイモの歴史からすれば、この話が、ペドリーロがロシアで活躍していた時期に作られたとは考えにくい。ロシアのジャガイモの歴史を見るならば、18 世紀前半には宮廷でもごくまれにしか食卓に出されなかったし、18 世紀後半にその栽培の是非をめぐって多くの議論がなされ、その後ようやく 19 世紀に入ってようやく定着した。こうしたジャガイモ史を考慮するならば、この小話が語られたのは、ペドリーロがロシアを離れてから後の 18 世紀後半も遅く、あるいは 19 世紀のことだろう<sup>(49)</sup>。

零落しても貴族は貴族か?

あるとき、食事の際にペドリーロの向かい側に、浪費がもとで自分の家屋敷をすべて失ってしまった一人の廷臣が座った。ある者がペドリーロに、この廷臣は何も食べてませんよ、と耳打ちした。答えていわく、当り前さ、彼はすでにすべてを食べつくしているから。[2—3]

「頭なし」「能・脳なし」「空っぽ」 без головы は、道化師によって繰り返し使われるキーワードである。

あるとき、ペドリーロはとても長身の宮廷人と口論した。しまいに



この男は我慢しきれずに叫んだ、これ以上おまえが黙らないとおれのポケットに入れてしまうぞ。ペドリー口は落ち着き払って答えていく、いいや、お前の頭の中がいいよ、そこには、空いた場所がいっぱいあるから。[1—15]

廷臣たちの「無能ぶり」をさらりと言ったのけたペドリー口の言葉は、確実に庶民の喝采をもらったはず。「図体はでかくとも、知恵足らず」か。見栄えが悪い宮廷人はお化けになぞらえられた。

ある集まりでオバケのことが話題になった。ペドリー口はそれが作り話でフィクションとしたが、彼の横に座っていたある宮廷人はそれに反論した。ペドリー口さん、申し訳ありませんが、私はこの目で見たのです。私の言うことが信じられないかも知れません。私の家の近くの庭には、落ちぶれた老人のオバケが時折現れるのです。私は二度も、月明かりの下で確かに見ました。頭のない人間を。それに応えてペドリー口いわく、ご廷臣殿、それはあなたの影だったのでしょうか。[2—9]

あるいは、ペドリー口は化け物の存在などそもそも信じない合理的な西欧人のたとえ話とも、アネクドートのテーマ（仮にこのタームを使用すれば）が一つの「模範解答」に収束してしまうことは、断じてない。

酒好きなロシア庶民の感覚からすれば、酒場の主人 трактирщик<sup>(50)</sup>は権力者だった。ペドリー口は庶民の味方となる。

ペドリー口は隣に酒場の主が住んでいた<sup>トラクチール</sup>ので、休息時にはこの酒場に行くことになっていた。あるとき、いつものように酒場に行き、食事をしたが、財布を忘れた。支払いのときに自分のミスを認めたが、

すでに遅い。次回まで待ってくれるよう、彼がどれほど懇願しても、主人は黙りこくっているばかり。しまいには、ペドリー口がそれでも引き下がらないのを見て、主人はペドリー口の上着を脱がせて家に帰らせた。この仕打ちにペドリー口は大いに憤慨し、仕返しの機会を狙っていた。酒場の主は鶏とひな、カモと七面鳥を飼っていたが、この事件があってからペドリー口が自分のもとに引き取って餌をやっていた。数週間が過ぎ、家禽は毎日の餌にも慣れた。あるとき、いつものように餌を与える段になって、ペドリー口は仕返しのチャンス到来とばかりに、家禽の羽根をすべてむしりとり、そのままとめの家に放してやった。家禽の姿を見た酒場の主は激怒してペドリー口のもとに駆けてきて釈明を求めた。彼いわく、私はあなたがしたのと同じことを家禽にしたのです。一ヶ月分の餌を要求したのですが、払いたくないというので上着を脱がせたのです。 [1—9]

C町へ行く途中でペドリー口が酒場に立ち寄り、そこの主人をからかおうと思った。「この町には、あなたを除いてロバ（強情なアホ）は多いのかい？」主人はかっとして、この恥知らずを追い出そうとした。それを引き取ったペドリー口いわく、ああ、旦那、ごめんなさい、間違いでした。ここにはあなたを含めてロバは多いのかい？ [2—8]

酒場主人との掛け合いは、多くのフォークロアを生みだし、民衆版画に欠かせぬ題材となった（例えば Ровинский, 1881, № 112）。多くの場合、ロバが馬鹿の代名詞となることは言うまでもない。

### c. 芸術家・知識人糾弾

「頭なし」の非難は不出来な作曲家にも向けられる。

できの悪い作曲家が自分の作品のくだらなさを印刷所のせいにした。

ペドリーロいわく、そのとおり、最初の楽譜にさえ頭がなかったから。  
[2—2]

才能のなさ、あるいはフロントページがないことを示唆しているのか。

ペドリーロが活躍した時代は、西欧からの導入の影響下に、演劇、音楽等の舞台芸術が大きく開花した時期である。バレエもその一つで、アンナ女帝の庇護もあって、フランス人ジャン＝バチスタ・ランド J・B・Landet (Landet) による、ロシアで最初の舞踏学校の開設が許可されている (1738 年)。したがって、バレリーナのスキヤンダルは同時代の巷の話題となったはずである。

バレリーナの C……は自分がやせていることで、優雅な骸骨というあだ名をもらっていた。あるとき彼女は自分のパトロンであるグリンスキイと、そして愛人であるドプスキイと舞台上で踊った。ペドリーロいわく、二匹の犬が一本の骨を求めてつかみあっている。[2—16]

グリンスキイは大貴族の名前だが、ドプスキイは不明。粘土を意味するグリナと樫を意味するドゥプの言葉遊びではないか。バレリーナの C 某は、上で述べた帝室舞踏学校卒業生（ただし、最初の卒業生が出たのは 1742、43 年）の中に見えるアクシーニヤ・セルゲーエヴァか、あるいは 1757 年にイタリアから来たバレエ団の一員で評判を取ったサッコーのことか<sup>(51)</sup>。

自身が舞台人であるからこそ、ペドリーロは芝居にはうるさい。

椅子に座り、まどろんでいたペドリーロは、大きな物音と口笛で目が覚め、全力で拍手をした。どうして？ と聞かれて彼は答える。皆さま、私は作者を称賛します。これほど見事な出来上がりなので、作者の戯曲の出来が悪い個所はすべて眠っていて鑑賞せず、あなた方と

同じく、耐えがたい退屈を感じないですみましたから。[2—21]

ペドリーロが多くの劇作品の一節とその作者に通じた教養人であることの例証として、

ある若者がペドリーロに自作の喜劇を読んで聞かせた。他の著者から取った言葉を耳にするたびにペドリーロは帽子を脱いでは、お辞儀をした。若者は驚いて、その理由を尋ねた。昔からの友人にお辞儀しているのです。[2—17]

もしかして、それほどまで他人の作品からの引用・借用（盗作？）を皮肉ったのか。そう考えられる理由は、この話をもとに作られたと思える話が1869年刊行のアネクドット集の中に見られるからである。

一人のフィレンツェのイタリア人が、土地の作家であるダンテ氏の作品を盗み、自分の作品に散りばめて、ペドリーロに向かって自身の妙技の作を読んだ。盗まれた言葉を耳にするたびにペドリーロは帽子を脱いでは、お辞儀をした。偽作者は、何をしているのかと訊ねた。昔からの友人にお辞儀しているのです。

図書館司書は、今も昔も尊敬されるべき人物であるはずだが、

知識がきわめて足りない男がプブリーチナヤ図書館の館員に任命された。彼と会ったペドリーロの言葉—ご就任おめでとう。ポストはあなたに好都合ですね。今やあなたは本の読み方を習う手段を手に入れたのですから。[1—18]

プブリーチナヤ（公共）図書館とは、現在の正式名称を「ロシア・ナショ

ナル図書館」といい、「プブリーチナヤ」「プブリーチカ」（いずれも「パブリック」から）と通称される。エカテリーナ二世の着想による、帝室図書館の建設が承認されたのは1795年5月のこと、翌年6月から建設が開始され、建物の完成まで20年を要したが、1796年10月に図書館は開館した（一般公開は1814年2月）。ペドリーロの活躍した時代にこの図書館が影も形もないことは、あらためて言うまでもない。この小話集が刊行された1830年代の図書館は、初代館長のA・H・オレーニンの指揮下に大きく成長していく時期にあたっていた。館員として書誌学者B・Γ・アナスタセーヴィチ、ジャーナリストのH・И・グレーチ、歴史家のΓ・И・スパスキイ（いずれも1817年以降）の他、寓話作家のИ・А・クリイローフやプーシキンの友人A・А・デーリヴィグ、「イリアス」のロシア語翻訳で知られるH・И・グネヂチらもここで働いていた（いずれも1810年代から30年代まで、クリイローフにいたっては1841年まで）ことを考えると、この小話の「波及力」と「怖さ」は底知れない。

次の話の主人公のB・K・トレヂアコフスキイと言え、18世紀前半から後半にかけてのロシア文学史上で燦然と輝く存在である。現在のロシア



図 14

詩の基本であるアクセント詩法を確立した（『ロシア詩作の新簡略方法』1735年）ほか、タルマン『愛の島への旅』やフェヌロン『テレマックの冒険』の翻訳、作品『テレマヒード』（1766年）で知られただけでなく、同時代の西欧の科学・歴史・思想にも通暁していたことから、長らくロシア科学アカデミーに勤務した傑出した当代有数の知識人である（図14）。

とても賢いヴァシリイ・キリロヴィチ・トレヂアコフスキイについて、ペドリーロはこう言った。彼は自分の著作にとってもよく似ている。作品と同じく、巷で販売することも、売却して手放すことも、きわめて難しいから。[2—7]

この大詩人の作品が難解で、なかなか売れない、だからといって、手放したくはないとの意味か？ アンナが帝位に就いたのと同年の1730年に、オランダ、フランスへの遊学から戻った詩人が発表したタルマン『愛の島への旅』の翻訳は、大きな評判を獲得し、それがもとで、彼の宮中への出入りが可能になり、さらに依頼を受けて女帝への賛歌も書くようになったのだか<sup>(52)</sup>。

『アネクドート集』にはトレヂアコフスキイが登場する話がもう一つあり、ここで彼はペドリーロの毒舌の的となっている。

ヴァシリイ・キリロヴィチ・トレヂアコフスキイは自分の優秀さを他人に感じさせたがった。書き物によれば、彼は背が低く、猫背だった。あるとき、ある学問的な問題に関して熱い議論がなされた折、トレヂアコフスキイが皮肉の笑いをこめてペドリーロに質問をした、君は疑問記号が何かを知っているのか。するとペドリーロは答えた、それは、ときに実に愚かな質問をする小さくて猫背の人物の姿です、と。[1—7]<sup>(53)</sup>

先に述べたように、トレヂアコフスキイはロシア学の礎を築いた「ロシア最初の、真に学問的な文献学者」<sup>(54)</sup>として当代最高の知識人である。アンナ女帝が即位した1730年に5年以上のオランダ、フランス遊学から戻り、直ちにロシア科学アカデミーに職を得て、貧困と周囲との「不和」の中で1759年まで勤務した。

ロシア語文章表現の中で「？」が疑問記号の意味を持つようになるのは

16世紀のことである（16世紀末—17世紀初頭のJ・ジザーニイやM・スモトリツキイの文法書では「；」の意味が記載）。それが定着するのは、まさにペドリーロや初期トレヂアコフスキイの時代であり（1731年刊行のB・E・アドドゥーロフの「文法書」）、1757年に刊行されたロモノーソフの『ロシア語文法』によって確立したとされる。とすれば、まだロシアの人々の間でも、疑問記号はいかなるものか、知らなくとも不思議ではない。そうした同時代の雰囲気はこの話は背景として映し出している。このことと併せて重要なのは、トレヂアコフスキイがアンナ帝の宮廷にもしきりと顔を出し、オードも作った宮廷詩人であったから、ペドリーロと面識があったことも十分考えられる。しかも、上記のとおり、彼は多くのフランス語、イタリア語作品の翻訳者として知られ、その中には、コメディ・ア・デラルテの作品も含まれていたから、ペドリーロとの関係はきわめて深いものがあつたはずである。天下の大詩人に対抗して敢然とやり返す道化の姿は勇ましい。

#### d. 守銭奴か？

ペドリーロがロシアで大儲けをしたことはすでに述べたとおりであり、彼が金銭に執着する話は多い。その中の一つ、当時の使用人の仕事の中身を具体的に知ることができる。

あるとき、ペドリーロが広告を出した。「馬の世話と食卓のサービスができる年配の人を求めています。他の仕事は以下のとおり、晩の祈禱の場において、走り使いをし、毎日、聖書の一章を読むこと。また、髪におしろいをかけることができ、詩編を歌い、カルタ遊びができる」とい。「家から追放される恐れがあるので、使用人たちと陰謀をめぐらすのを禁じ、靈に反して肉体が謀反をおこさぬように、年俸は5グリーヴナ」[2—11]



ここで語られる広告とは、どこに、どのような形で行われたのか<sup>(55)</sup>。ここで検討しているアネクドート集の刊行された1830年代にはすでに、活字出版による新聞・雑誌等の定期刊行物や書籍が大きな情報源として機能していた（その影響は、アネクドート集の中にも見られる<sup>(56)</sup>）。アネクドートそのものはあくまで口頭で伝承されたものであっても、アネクドートの中に文字媒体による情報が「テキスト内テキスト」として登場し、さらに口承で広まっていく現象の一端がここに明確に見られる。俸給の5グリーヴナ（1グリーヴナは10コペイカ）はあまりにも安すぎる。

ペドリーロはとてもけちな男だった。抵当を取って金を貸していたのだ。あるとき、6パーセント以上の利子が禁止されたが、その後、貴族の息子がペドリーロのところに来て借金を申し込んだ。すると彼はチョークを取り、壁に「9」と書いた。貴族の男は叫んだ、この恥知らず！ 神を恐れぬのか？ ペドリーロは答えていわく、どうして恐れることがありましょう、神様は上からご覧になり、6としかわかりませんよ。[1—21]

読み（聞き）方によっては、とんでもなく恐ろしく、不謹慎な語りのテキストである。民衆にとって、この道化師は貴族ばかりか、神をも欺く大悪党なのだろうか？

ただし、その一方で、彼がお金に気前がいいことも民衆は忘れてはいない。

床屋がうっかりペドリーロの顎鬚を切り落としたところ、二倍の勘定が支払われた。ペドリーロいわく、一つは散髪分、一つは止血分だ。[2—12]

役人にしかるべく頬打ちを食らわせたかどで、ペドリーロは3ルー

ブリの支払が言い渡された。彼はいわく、これは高くない。そしてテーブルに6ルーブリを投げると、役人にもう一発食らわせた、これで勘定済みだ。[2—25]

e. 名言・名答

先のユダヤ人の場合と同じく「助言」を求められたペドリー口の当意即妙の回答例、

けち男がペドリー口に、リュウマチがとても痛むので、立つことも、座ることも、横になることもできないと訴えた。ペドリー口は答えて、「最後の手段は首でぶら下がることでしょうな」[1—4]

1777年に株がおおいに下がったとき、大きな金額を買いだめしていたある人物がペドリー口に尋ねた、株は上がるか、どう思う？ 上がるさ、それで風を作るようにあなたの子供たちに言いなさい。[2—11]

1777年、とうの昔にペドリー口はロシアにはいない。

ペドリー口のところで働いていた料理人が台所から魚を失敬し、コートの下に入れて持ち去ったが、コートが短すぎて魚の尻尾が下にはみ出していた。ペドリー口は泥棒を見て、言った、よく聞け、今後盗みを働くことを思いついたならば、もっと短い魚を狙うか、もっと長いコートを用意しろ。[1—14]

使用人の中にいる盗人への助言もしゃれている。

自らも宮廷人である道化師には、女性への周到的なマナーと心遣いも欠かせない。

ある暑い日にペドリーロは川で水浴びをしていた。いきなり川岸で、ご婦人がたが乗る馬車がひっくり返った。水から飛び出したペドリーロは、急いで水中の人々の助けに行った。彼女たちに手を差し出して、お許しください、ご婦人がた、手袋なしで。[1—19]

あるとき、男爵夫人Д……のところで集まりがあったが、そこは、品物の似たところと違いを見つけ出すという頓知遊びを楽しむ場だった。ペドリーロが入ってきたのを見て、男爵夫人が質問を出した。「わたくしと時計との違いは何？」答えていわく、時計は時間を思い起こさせますが、あなた様は時間を忘れさせます。[2—6]

男爵夫人Д……とは誰のことか。ペドリーロの時代にはドルゴルーキ一族が大きな力を持っていたが、男爵は基本的には外国人に与えられた爵位であった。

もともとペドリーロは音楽家、バイオリニストだった、

イタリア人のペドリーロはハープを巧みに演奏した。しばしば社交界に登場しては自らの演奏で聴衆をうっとりさせた。あるとき、Д……連隊長のところではハープを弾いたとこと、客の中の一人の女性が魅せられ、彼の演奏をすべて聞き終わってこう叫んだ、ああ、ペドリーロ、キスを！ お願いだから、別れのキスを。ペドリーロは立ちあがり、ご婦人を抱きしめ、彼女のバラ色の唇に熱いキスをした。ご婦人は彼の厚かましさに驚いて、こう訊ねた、どうしてこんな大胆なことができますの？ だって、あなたがそれを求められたのだから。女性は続けていわく、私が求めたのは別れのキスのロマンスで、あなたではないわ。[1—16]

道化師の行動の大胆さを称賛したものか、それとも道化師への差別と理

解すべきなのか。

アネクトートにはペドリー口の息子も登場する。

ペドリー口には身持ちの良くない息子がいた。ひとところに住むのに飽きた彼は、世間を知るためによそに行きたいと父親にせがんだ。ペドリー口が応えて言うには、お前が世間を知るためにお前を手放すことに、おれは反対ではない。だが、世間がお前を知ることが心配だ。  
[2—5]

ペドリー口に息子がいたことは確認できない。「可愛い子には旅をさせ」は名言だが、ペドリー口親子の場合はどうか。不良息子への至極まっとうな親心の一端を覗くことができる。

#### f. 道化師の誇り

道化師たる者は自分が世間からの風刺の対象となることに何ら恐怖心を抱かない。どのような場合でも、自分自身への風刺や誹謗中傷は堂々と受けて立つ、というのが基本的なスタンスなのであろう。そうした小話として、

あるつまらぬ作家がペドリー口を風刺した、とても悪辣な風刺作品を作ったとの話がペドリー口の耳に入った。彼はそれを読むのを拒み、こう尋ねただけだった、そこにはビロン公を侮辱するような部分があるのか、と。ないと答えを受けて、ならば、作者は放っておけ。[1—6]

あるとき、見せしめ台のわきに男が立っているのを目にしたペドリー口は尋ねた、この男の罪は何だい？ 罪人は答えた、大臣たちを中傷したのです、と。ペドリー口いわく、えい、兄弟！ おれのことを

ネタにすればよかったのに、そうすれば、おまえには何も及ばなかったのに、[1—8]<sup>(57)</sup>

道化師の存在理由を語るものとして、

一人の頭の良くない宮廷人がペドリーロに尋ねた、おまえはどうしていつも馬鹿をやっているのか、答えはつまり、理由はただ一つ、あなたには知恵がなく、私には金がないから、[2—18]

ペドリーロの同僚として宮廷道化師の一人であるイヴァン・バラキレフなる人物がいたことは上述した。彼は1699年に貧しい貴族の家に生まれ、修道院の小姓として働いていたが、その後宮廷内で使用人、のちに道化師の身分を獲得した<sup>(58)</sup>。1724年に逮捕され、拷問を受けたが、エカテリーナ1世が帝位に就くと流刑先から戻り、プレオブラジェンスキイ連隊で兵士となり、さらにアンナの治世に再び「お馬鹿」となって女帝に笑いを提供する職につくという波乱の人生から見て、彼は筋金入りの道化師であり、その意味でロシアの道化師の原型とされる場合が多い（したがって、彼にまつわるアネクドート集がきわめて数多く刊行されている<sup>(59)</sup>、図15）。このバラキレフとペドリーロの掛け合いは、おそらく宮廷内の雰囲気を大いに盛り上げたにちがいない。

二人の道化師が、帆船で自分の町を視察するピョートル大帝に同行した。ペドリーロが海軍省の建物の尖塔を眺めながら、言った、僕は、りんごに止まった蠅が右足で耳を掻いているのが見えるくらい視力がとてもいいんだ。ドルミドーシャ、きみにはそれが見えるかい？ それに対する答えは、きみほど目が良くないけれど、そのかわりに、その蠅が「私を起こさないで」を歌うのが聞こえるよ<sup>(60)</sup>。



図 15

指摘するまでもなく、ペドリーロはピョートル大帝期のロシアにはいなかったから、この話が歴史的事実に反するとしても、この二人が宮廷の中で「馬鹿な冗談」を繰り返し、周囲の人々を笑わせていたことは明らかである。こうしたとりとめもない細部から見えてくるのは、ピョートル期とそれに続く時代の宮廷内に産まれていたであろう《笑いの空間》であり、こうした宮廷内の雰囲気

気を、史実や具体的な人物名の「間違い」や「混同」を超えて語り伝えた、あるいは語り伝えようとした一般民衆の反応とメンタリティである。

宮廷内には、道化を好む一方で、道化師の存在を疎ましく思う雰囲気も確実に存在していたことを物語る話。あるいは、ツァーリはやはり賢くならねばいけない、との寓意もあるのだろう。

ある宮廷人がペドリーロに言った、もしも自分がツァーリになれば、すべての道化師を絞首刑にするよう命令する。答えていわく、それはどうでしょうか、あなたがツァーリになるならば、もっと賢くなければならぬでしょう。[2—23]

アンナ女帝も笑い話には登場する。ピロンとともにペドリーロの庇護者であるアンナ女帝自身とも、他愛ないおしゃべりや馬鹿話をしたはずだが、1836年刊行のものには収録されていないので他の本から一つを紹介する。無類の狩猟好きだったアンナは、首都から100露里以内の場所で一般人がウサギやキジを含む家禽の狩りを禁じたほどであるが<sup>(61)</sup>、特に犬を使わない狩猟をとっても好んだ。

あるとき、アンナがペドリーロを鴨用の銃弾で狙い撃ちをした。彼は後ろにふっ飛び、噴水の中に落ちたが、その後 500 ルーブリの贈り物で慰撫された<sup>(62)</sup>。

次の小話は「危険発言」を含む。発言の主がロシア語のネイティブ・スピーカーではないことは、この場合、事態にどのような影響を与えたのか。

あるとき、ペドリーロは宮中で、もう女帝は必要ない!! と言った。ただちに逮捕された。以下は言い訳である、皆さん、あなたがたはお分かりではないのです、私が言いたかったことは、そして今も言いたいのは、われらの女帝には不足がないということです、だってこれほどに慈意あふれていらっしゃるのですから。[2—19]

「女帝不要」とはおだやかならず、何とか言い逃れた、と考えるべきかもしれない。だが、原文の не нужно более「もう（これ以上）必要ない」の解釈の問題ははっきりと残る。

注

- (41) ここでは、アネクドートとは何かの議論はしない。さしあたっては、Курганов による一連の仕事、また、Шмелева Е. Я. и Шмелев А. Д. Русский анекдот. Текст и речевой жанр. М., 2002 も参照。
- (42) Адамка Педрилло, 1836. 序文（著者名は А. П.-в.）には、この小話集が編まれた 19 世紀が「啓蒙と教育の世紀」なので「われわれには道化は必要ない」と記されている。また、本書の読者の方々は、ラジェーチニコフ作の長編小説『氷の家』（1835 年刊行）を読みましたか、との一文も同じ序文にある。アネクドート集の出版もこの小説の評判を契機としたのでは、と考えられる。いずれにしても、この同時期に、アンナ女帝期と宮廷道化への関心の高まりがあり、さらには、この時代のプーシキンも含めた歴史小説への「まなざし」を検討すべきだろう。ちなみに、ラジェーチニコフ作『氷の家』は 1835 年に刊行されて評判を呼び、ただちにドイツ語、フランス語訳が出版された。1838 年には新版が出たが、その後、検閲によ



り、A・П・ヴォルインスキイ処刑をめぐる記述の是非の判断から1850年に新版が発禁となり、1858年の選集収録の時点で許可された。

- (43) 以下の引用は、Адамка Педрилло, 1836による。
- (44) エルンスト・ピロンの略歴は以下の通り。1690年11月、クールラント公廷臣の家庭に生まれる。1714年に首都ペテルブルグへ行き、宮中勤務を求めるが、出自の低さを理由に拒否される。1718年、三等官内官П・М・ベストゥージェフの紹介でアンナの下で侍従として勤務、1724年5月エカテリーナ一世即位式のためモスクワへ行くアンナに同行、1730年1-2月アンナの皇帝即位受諾のモスクワ行きにも同行、4月ピロンは侍従長職に就く。1737年6月、クールラント公に選出。1740年10月17日のアンナの死から二日後に出たイオアン6世の命「以後、すべての文書における高位貴族閣下の肩書は、ロシア帝国摂政殿下、クールラント、リフラントならびにセミガルの公とする」(Соловьев, 1993, с.9)にもかかわらず、11月8-9日に逮捕、シュリセリブルグ要塞に収監、1741年4月死罪宣告を受けるが6日後にシベリア流刑に変更、ペルムへ送られる。1742年、シベリアから戻るが、ヤロスラヴリ居住を命じられ、1762年3月、ようやくペテルブルグへの帰還が許可される。同年8月、クールラント公に返り咲き、1769年に息子ピョートルに譲るまでこの地位にあった。1763年ミタウへ凱旋入場(1764年7月にはエカテリーナ二世がリガ、ミタウへ行幸)、1772年12月ミタウで死去した。彼の言葉によれば、22年をアンナに寵臣として仕え(クールラント時代も含む)、彼女の死後22日間をイヴァン六世の摂政として、22年を流刑に、82歳で亡くなるといった数字の2にまつわる人生という。ちなみに、ピロンの宮殿は現在、ラトビア共和国国内のリガ市南約60キロに位置するルンダーレ宮殿(カルロ・バルトロメオ・ラストレリが1736年に着工、完成はピロン帰還後の1767年)として現存、ソ連時代にはほぼ放置されていたが、現在は改修して豪華な姿を見ることができる。また、ピロン父子の墓は、リガ南西約40キロのイェルガヴァ(旧ミタウ)市内の宮殿(これもラストレリの作、1738年着工、1772年完成、現在ラトヴィア農業大学)の歴代クールラント公の霊廟内にある。ピロンに代表されるバルト・ドイツ人の役割については、今なお多くの議論がある。М・ラエフは、バルト・ドイツ人はロシア国家内で高い地位を獲得し、大きな影響を与えたにもかかわらず、バルト・パターンの土地財産特権や権威をロシアへ導入することなく、故郷のバルト

の地で自身のポジションを高めていった点に注目する (Raef, 1966, p. 85).  
ピロンもこの特徴にあてはまるであろう。

- (45) 「エチケット」に関しては、ベレストロイカ期からソ連崩壊前後にかけて多くの議論がなされ、その中核にあったのは A・K・バイブーリンをはじめとするロシア民族・民俗学者たちだった。Байбурин А. К., Топорков А. Л. У истоков этикета: Этнографические очерки. Л., 1990 を参照。  
また、客人歓待 hospitality, гостеприимство に関する最新の研究成果 Традиционные и современные модели гостеприимства. М., 2004 が参考になる。これは 2002 年のロシア、フランス共同のコンフェランスの報告集である。
- (46) まったく同じ話が、ゴリツィンにピロンが訊ねる形でアネクドート集 (1869 年刊) にある (Анекдот, 2003, с. 33)。
- (47) Анекдот, 2003, с. 27.
- (48) 1869 年刊の「アネクドート集」では、名声を好む B 公爵は「ロシア宮廷に参内していた神聖ローマ帝国大使のヴラチスラフ公爵」となっている。
- (49) R. T. F. スミス, D. クリスチャン『パンと塩』(鈴木健夫他訳, 平凡社, 1999 年) p. 279-281, 380-392 を参照。ロシアではジャガイモは「19 世紀まで日常的な大衆消費品目にはならなかった」とされる。1730 年代のピロンの食卓には「ジャガイモがしばしば出された」とする記述を著者は疑わしいとしている。ただし、1740 年代宮廷でも「非常に僅かしが出されなかった」とあるのは適切であり、18 世紀後半以降、「自由経済協会」ならびに博物学者 A・T・ボロトフも含めた「上からの」働きかけによって 19 世紀にかけて普及していった。
- (50) 酒場と訳した трактир は、もともとはピョートル大帝期以後に生まれた街道沿いにある旅人用宿泊所、1850 年代以降は宿泊なしの中下流の料理店・居酒屋のこと。ただし、трактирное заведение はレストラン、カフェ、ビュフエの他、トラクチール、スタローヴァヤ、ハルチェヴニャ等々を含む宿泊・飲食施設の総称。これについては、岩田悟「19 世紀半ばのロシアのレストランと遊園地について」(一橋大学言語社会研究科修士論文, 2009 年度提出) に詳しい。この二つのアネクドートの背後には、中世以来の徴税人も兼ねていた酒場主人に対する意識に加えて、18 世紀初頭以降の「交通」の発展、国内外移動の活発化、街道整備と宿泊・外食施設の成立等による「新たな」人間関係の誕生が窺える。ちなみに、このト

ラクチールの主人はドイツ人が多かった。

- (51) Лифарь, 1945, с. 30-32. このセルジュ・リファールによれば, 18 世紀前半のロシア・バレエにはフランスよりもイタリアのバレエの影響がより大きいという。同書は初期バレエ史に関して簡略ながらも信頼できる記述が多く, 役立つ。
- (52) 1732 年 1 月のモスクワからペテルブルグへのアンナの「帰還」を祝って語られた「女帝陛下のペテルブルグへの無事ご到着を寿ぐ言葉」は, 実質的にオードと呼べるという (Успенский, 1990, с. 221)。トレジアコフスキイの最初のオード創作は 1734 年。
- (53) 1869 年版は, Анекдот, 2003, с. 26-27. このアネクドートは, 川崎浹『ロシアのユーモア』(講談社メチエ, 1999 年) に紹介されているが, この話とペドリーロに関して「エリザヴェータ治世の後半, 1750 年代後半にはそれだけ道化のレベルが上がっていた」とあるのは明らかな誤りだろう。
- (54) Пумпянский, 1941, с. 215. 彼によれば, 1734-35 年のトレジアコフスキイによる詩法改革提唱の契機となったのは, 彼がロシア帰国後に初めてドイツ語・ドイツ詩を学んだことにあり, その背後には, ビロンの影響ならびに多くのドイツ人が活躍していた科学アカデミーの存在という状況があった (Пумпянский, 1941, с. 224)。
- (55) 以下で引用する彼の妻の探索願いの話 [2—1] では「通報」となっており, これは 1702-27 年, さらに 1728 年からは「サンクト・ペテルブルグ通報」として発行されたロシア最古の新聞であり, その紙面上の広告のことか。
- (56) ペドリーロはビロンの許可を得た上で, 自分の手元にある 15 の原稿を掲載すべく雑誌「賢者のためのジャーナル」を掲載している [2—24]。その内容は, 国内ニュース, 公告, モード, 訃報, 科学的発見, 商品売り出し, 寄付の呼びかけ等である [2—25]。
- (57) 同じ話は, 大臣をメンシコフに, ペドリーロをダコスタに入れ替えて語られている (1868 年のアネクドート集, Курганов, 1997, с. 84 より引用)。
- (58) ただし, ペトロフによれば, バラキレフはピョートル期には道化師ではなく, アンナの時代に初めて道化師として宮廷にデビューしたという。
- (59) Шубинский, 1995; Ровинский, 2002; Бердников, 2009, с. 82-95.
- (60) 1889 年に刊行されたアネクドート集より, 二人の道化師の名前はロモノソフの詩にも見える。
- (61) Костомаров, 1876, с. 143. 狩猟禁止は都から 30 露里以内との記述 (Шубин-

ский, 1873, с. 61) もある。

(62) Балакирев, 1889.

### 3. 民衆版画の中で

19世紀後半に活躍した図像学者 Д・А・ロヴィンスキイの『ロシアの版画肖像画詳解事典』（全4巻）は、ロシア史上の人物の肖像画に関する情報を網羅的に記述した特筆すべき仕事である<sup>(63)</sup>。そのペドリーロの項目を参照するならば、彼の肖像画としてあがっているのは、銅版画「楽師ファルノス」（ロヴィンスキイ『図版集』第1巻, No. 209, 図16）、木版画「赤鼻のファルノス」（同, No. 209a, 図1）、「ファルノスとピガーシヤのおしゃべり」（同, No. 112, 図17）の三点、そしてロヴィンスキイ自身のコレクション中にある J・C・トレメールの著作に収められたとされる挿絵（後述）の計四点である。この中で前者三点はどれも、作者名が判明している画家たちによる皇帝や貴族の肖像画とは異なり、17世紀半ばに誕生した典型的な民衆版画（ルボーク）の作品である。

三点の作品とも、主人公の名前はペドリーロでなく、ファルノスとなっている。ロヴィンスキイが出した「結論」は、ペドリーロはイコールファルノス、というものである。以下で、そのことを概略してみよう。

ルボークには、楽師が描かれる場合が多い—ヴォルインカ（風笛）を演奏する道化師が登場する銅版画（ロヴィンスキイ, No. 103）、バイオリンを演奏する楽師ファルノスが描かれる1820年代の銅版画（同, No. 209）等々。また、「踊り手と放浪芸人」（同, No. 102, 図18）では、道化師の服装をして鈴をつけた放浪芸人がヴォルインカを演奏するが、ロヴィンスキイによれば、これはファルノスの姿を想起させるという。

ここでたびたび言及されたファルノスとは一体誰か。В・И・ダーリの辞書によれば、人名を示すファルノスの形容詞形 фарносный は「鉤鼻の」、фарнычка は「罵倒語」、そしてファルノスそのものの普通名詞形 фарнос は「鼻高」「高慢な男」の意味である<sup>(64)</sup>。また、イタリア人研究



图 16



图 17



图 18



图 19

者カルロ・ソリベッチによれば、ファルノスの名前はイタリアの道化師 Gian Farino に遡り、彼の仮面（farina は「粉」の意味）と結びつくという<sup>(65)</sup>。

ここで重要なのは、ファルノスが楽師でバイオリン奏者であることに加えて、彼の名前について「あっぱれな男ペトルーハ・ファルノスである、なぜならば俺の鼻は大きいからだ」と説明書きがされていることである。ペトルーハは、改めて述べるまでもなく、ロシア人形劇の主人公であり、それは多くの場合、中世ロシアの放浪する役者や楽師が路上で上演していたものである。しかも、これらの役者と芸人たちは、例えば青いカフタン（上着）、赤い長靴あるいは短靴、赤いコルパーク帽（「お馬鹿のコルパーク帽」）といった放浪芸人に特有の服装を身にまとっていた<sup>(66)</sup>。それはそのまま、ルポークの画面に見られる姿であった。

民衆版画「ファルノスとピガーシヤのおしゃべり」（同上、No. 112、図 17）では、洒落て道化師風に着飾ったわれらの主人公が妻とともに酒場へ入っていき、徴税人のエルマークとおしゃべりに興じている。

そもそもルポークには、きわめて多くの男女道化師や「お馬鹿」が描かれるのであり、そのことから、一群の道化師＝戯け者の肖像画こそがルポークにとって最も愛され、人気のあるテーマであるとさえ断言できるかもしれない。描かれた道化師は、外国渡来、宮廷、ロシア、街頭の、という具合に実に多種多様である（カルプとラリヤ、フォーマーとエリョーマ、パラモーシュカとサヴォーシカ、ヴァヴィーロとダニール、パーシュカとエルモーシュカ、プローホルとボリス、ゴノスとファルノス等）。ロヴィンスキイによれば、ゴノスとファルノスの絵はラコスタとペドリールを描いたものだという。おそらく、ファルノスの原型がペドリールであることに大きな異論は生まれない<sup>(67)</sup>。ゴノスはイタリアのパントマイムに起源を持ち、アルレキーノと同様に、インテルメディアの主人公＝道化師である<sup>(68)</sup>（ロヴィンスキイ、No. 2096、図 19）。アルレキーノのイメージは、イタリア喜劇がロシアを巡業先とした 1730 年代以降のロシア観客にも知



られ、ガーエル（すでに述べたとおり、ドイツ語 Geiger 「バイオリン弾き」より派生）の姿で（「ロシアのアルレキーノ」）ガーエルの婚礼に関するインテルメディア<sup>(69)</sup>の中や、ガーエル＝アルレキーノとしてゴノスが登場する18世紀のルボーク「ガーエルと仲人女」（ロヴィンスキイ、No. 137）に見える。すでに述べたように、ラコスタはペドリー口のライバルである。ここで注目したいのは、ゴノスとファルノスが「宮廷道化 Hofnarr から民衆道化 Volksnarr への移行」を示す存在である、というロヴィンスキイの言葉である<sup>(70)</sup>。ここには、道化師が宮廷から市中へ活動の場を広げるにつれて、彼らにたいする社会的記憶が上層部と民衆の文化の双方で共有されていく過程が指摘されていると考えてよい。あえて別の言い方をすれば、道化師は隔絶した両者の文化を結ぶ役割を担う存在ではなかったのか。

ロヴィンスキイはペドリー口の項では言及していないが、他にもファルノスの登場するルボークはある。18世紀前半の銅版ルボークの有名な作品「ネコを埋葬するネズミ」（同上、No. 170）がそれである。102匹のネズミの中で第33の番号がつけられたネズミが「赤鼻のファルノス」である。ロヴィンスキイは、これがピョートル大帝お気に入りの道化師であるとしている。しかし、絵の下に読める「赤鼻のファルノスは草履を履きつぶし、寒さで草鞋を台無しにする」という説明から判断するかぎり、このネズミは宮廷道化師ではなく、庶民ないしは農民であろう。あるいは、宮廷から出て街頭で凍えていた道化師か？<sup>(71)</sup>（ちなみに、このネズミとネコのルボークはピョートル大帝の「死」「葬式」と結びつくと言われるが、彼の死は1725年1月）。いずれにせよ、民衆にとって夏のもっとも基本的な履物である草鞋が外国起源の人名とともにここで言及されていることは興味深い。

ダーリの名高い辞書には、ファルノスという単語に特別な意味が与えられていないことは上記したとおりである。なぜならば、この名前はそれほどまでにロシアで定着し、人物の外見的特長を指す普通名詞となっていた



のだから、ミーラあるいはペトリーロという外国人楽師の名は、ファルノスという名を介することでロシア化し、ペドリーロという道化師の名前として、ピョートルあるいはペトルーシュカに代表される伝統的なロシア文化における笑いの主人公・芸人と「一体化」した。

注

- (63) この事典の概要、さらにロヴィンスキイの生涯と仕事の全容に関しては、坂内徳明、2006b を参照。
- (64) Даль-Бодуэн, 1911-1914, т. 4, с. 1133. ファルノスという言葉が фарс (笑劇, 狂言) プラス нос (鼻) という滑稽な印象を与える語形成から生まれたことは、あらためて指摘するまでもない。
- (65) Kelly, 1990, p. 127.
- (66) Власова, 2001, с. 415.
- (67) Ровинский, 2002, с. 220-221.
- (68) Kelly, 1990, p. 127.
- (69) Пьесы, 1976, с. 749-768.
- (70) Ровинский, 2002, с. 220. ロシア革命前の優れた音楽民俗学者である А・С・ファミンツィンの名著『ルーシにおける放浪芸人』(Фаминцын, 1889) によれば、民間には「エンドウ色の道化師」と「縞模様の道化師」という二つの言い回しがあるという。それぞれの衣装とその色から、前者がロシアの伝統的な笑い芸人、後者が舶来の、あるいは宮廷の芸人という民衆的な区分けの事例であり、道化師をめぐる「ダイグロシア」状態を考える上での手がかりとなる。
- (71) 作品「ネコを埋葬するネズミ」については、取りあえず、坂内徳明, 2006a, p. 179-186.

#### 4. 妻たること

ロシア・ナロードの口頭伝承の世界では、道化師ペドリーロの妻と息子、そして親類が登場する。家庭内部や親族関係に多大な興味と好奇心を示すロシアの人々にとって、笑い話のヒーローは家族持ちでなければならない。ペドリーロの息子の話は先に紹介したので繰り返さない。多くのアネクドートの中でペドリーロとその妻についてしきりと語られていることは注目



図 20

に値する。

#### a. 道化師の妻たち

ペドリローの妻の話を検討する前に、アンナの宮廷道化師仲間の妻たちについて触れておきたい。すでに述べたとおり、アンナの宮廷にあった公式の道化師は、ポルトガル生まれのユダヤ人ダコスタとイタリア人のペドリローの外国人二人、ヴォルコンスキイ公爵、アブラクシン伯爵、ゴリツィン公爵のロシア人貴族三名、

ピョートル期以来の道化師でロシア人のバラキレフである。史実上正しいかどうかは別にして、フォークロアの中では全員が妻帯者である。

ポルトガル出身のユダヤ人であるヤン・ダコスタは、すでにピョートル大帝の時代から宮廷道化師として働いていた（図 20）。ツァーリ主催の飲み会には必ずいたとされ、例えば、乾杯の際にピョートルが言葉を言わないときには、その代わりにダコスタが言葉を発し、そのたびごとに皇帝から千ループリを取ったとされるほどの人物である。その彼と妻の逸話は多い。

あるときダコスタと妻が告解のためカトリック司祭のもとに行き、告解が済むと司祭はダコスタに鞭の仕置きが必要だと考えた。妻は言った、神父様、私の夫の身体はとてもヤワなのです。よろしければ、私が夫の代わりに懲戒を受けて耐えます。司祭は同意し、ダコスタの妻を鞭打ち始めたが、夫は目前の光景を喜び、こう叫ぶのだった、ヤツを打て、もっと強く打て、神に見放された罪多きこのおれのために！ ダコスタと妻とがとても仲が悪いのは周知のこと<sup>(72)</sup>。

とても博識だったダコスタは読書が大好きだった。彼の妻は、夫とはあまり仲良くなかったが、慈しみあうときに、夫に言った、ねえ、いといい人、あなたの欲望の的になるために私は本になりたい、と。すると道化師いわく、それならば、おれはお前を日めくり暦にしてやりたいよ、毎日替えられるから<sup>(73)</sup>。

あるとき、ダコスタは妻のことをとても強く叩きのめしたので、親類たちが文句を言い、自分を抑えるよう忠告した。すると、ダコスタいわく、ああ、私は自分を抑えるためにこそ彼女を叩いたのです。なぜなら、夫と妻は一身体ですから<sup>(74)</sup>。

ダコスタの妻は夫からよく耳にしていた、コーヒーが自分の悲しみの特効薬である、と。だから、夫が死ぬとすぐに彼女は叫んだ、一刻も早くコーヒーをちょうだい！ 私はとても不幸なの！ コーヒーカップが渡され、飲み干したとたん、彼女はすぐさま、以前のように陽気になった<sup>(75)</sup>。

ペドリーロのアネクドートと共通する部分も多い。そして、どの話も夫婦関係の「おかしさ」と「ごちなさ」、「悪妻ぶり」とそれにたいする夫の「反撃」をテーマとしているのが特徴的である。

バラキレフについては、すでに述べた。妻はポサード民モロゾフの娘で、二人は1732年に結婚したが、その際、新郎が持参金をもらっていないことを知ったアンナが、ただちにその200ルーブルの支払を命じたという<sup>(76)</sup>。

ニキータ・フョドロヴィチ・ヴォルコンスキイ公爵は名門の出だが、変わりものとして知られ、すでにミタウ時代から自分の周囲に道化師を集めていたとも、自らもおふぎの数々で評判だったとも言われている。その妻アグラフェーナは、ピョートル・ミハイロヴィチ・ベストゥージェフの

娘である。彼女の父親は、クールラントに嫁入りしたアンナの「お目付け役」としてピョートル大帝が送り込んだ人物であり、宮廷長官として（1712—30年）、ビロンが頭角を現し彼にその座を奪われるまでアンナの寵臣として、クールラント公国の文字通り支配者となった。彼の娘アグラフェーナは、アンナにとって最初から女性としてのライバルであったにちがいない。寵臣の娘で、しかも若く知性にあふれたアグラフェーナが、名門貴族ヴォルコンスキイ公爵と結婚し、表面上は愛情あふれた夫婦生活を送っていることは、結婚直後に寡婦となったアンナにとっては心騒いでいたはずである。しかも、聡明な妻アグラフェーナ・ヴォルコンスカヤは筆頭側近 гоф-дама としてエカテリーナ（一世）に仕え、周囲に多くの宮廷貴族を集めていたという（この集まりは、ロシア最初のサロンとも呼ばれている<sup>(77)</sup>）。彼女の目覚ましい活動と、そしてエカテリーナとの関係がアンナの気持ちをますます不安に高ぶらせることとなる。アンナが女帝の座に就いた1730年、ビロンとアンナが父親を追い落としたことにたいし、娘は激しくアンナを非難し、それがもとでヴォルコンスカヤはチフヴィン修道院へ送られることとなった。その地でアグラフェーナが死にかけているとき、アンナは追い打ちをかけ、田舎にひきこもっていた夫を探し出して宮中の道化師とした。仕事はアンナが可愛がっていたボルゾイ犬の世話だったという。1732年に妻は修道院で失意の中に亡くなったが、さらにアンナは、それにとどまることなく、残った夫を、次に記す同じく道化師のゴリツィン（男性！）と「おふざけで結婚させた」のだった。アグラフェーナへの復讐劇の延長なのか、それとも他愛無い悪ふざけなのだろうか。ただし、1740年のアンナの死後、夫は道化師の役目から解放され、少将の位を与えられ、また、息子のミハイル（1713—1786年）は陸軍大将となり、ロシア・ポーランドのあらゆる勲章の所持者、モスクワ総司令官、元老院議員となったから、アンナの呪詛も消えたのだろう。

ミハイル・アレクセエヴィチ・ゴリツィンは、歴史ある名門の一員として、1689（88?）年に生まれた。父親はペルミ総督、祖父はソフィヤ皇女

の愛人だった。当初、陸軍に勤務し、中將の地位を得た。最初の妻は1694年生まれのマルファ・マクシーモヴナ・フヴォストヴァ（死亡年は1729年、あるいは21年とも）である。男女それぞれ一人の子供がいて、娘は次に述べる道化師のアブラクシン伯爵に嫁ぐことになる。二人目の妻はイタリア人マリヤ・フランツィスカで、彼がフィレンツェに赴いた際に知り合い、ハノーヴァーで結婚、カトリックに改宗した。1732年に二人はモスクワに戻り、新しい妻の存在も改宗したことも秘密にしようとしたが発覚し、大問題となる。結婚式を挙げた1722年時点では最初の妻が生きていたことから「重婚」と見なされ、改宗したことと合わせて、シノド（宗務院）からは15年の懲戒処分を受けた。さらに1733年、アンナから道化師の身分を与えられた。あだ名は、彼の道化師としての仕事でアンナにクワス（ロシアの伝統的発酵飲料）を出すことから、クワスニンあるいはクワスニクである。また、ヨーロッパから彼が連れ帰ったイタリア人の妻は、強制的に結婚解消を求められ、一時、モスクワのドイツ人村におそらく収監された後、1736年9月にはペテルブルグへ戻されたという（彼女のその後の運命は不明）<sup>(78)</sup>。

さらに、この道化師の運命はアンナによって大きく展開する。先に触れた1740年2月の「氷の家」での結婚式とその「馬鹿騒ぎ」がそれである。新郎はすでに50歳を過ぎていたし、新婦エヴドキヤ・イヴァノヴナはアンナの取巻き女性の一人のカルムイク人であるが、姓はアンナの好きな料理である塩茹で豚 *буженина* からブジェニノヴァとされた。この妻は婚礼から二年後の1742年に死去している。ゴリツィンはと言うと、1744年にアグラフェーナ・アレクセーエヴナ・フヴォストヴァと四度目の結婚をしている<sup>(79)</sup>。1775年に彼は78歳で死去した。

このゴリツィンの最初の妻との間に生まれた娘エレナ（1712—47年）が、アレクセイ・ペトロヴィチ・アブラクシン伯爵（死去は1735年、38年とも）の妻である。彼は、ピョートル期の著名な海軍提督の従兄弟であり、エカテリーナ一世の下で侍従として勤務し、1729年に結婚した。岳

父の影響からカトリックへ改宗したことが知られるが、いつから道化師となったのかは不明である。

このように見てくると、ピョートル期から道化師だったバラキレフとダコスタ、それに次に述べるペドリーロを除いて、三名の貴族たちがなぜ道化師になったのかを考えると、そこには妻も含めて宗教問題、具体的にはカトリックへの改宗問題が潜在していることを指摘しないわけにはいかない（もちろん、ヴォルコンスキイ夫妻は二人とも正教徒であったし、グリツィン本人はカトリックへ改宗したものの、イタリア人を除く三名の妻も正教徒であったはずである）。これについては、後に検証したい。

#### b. ペドリーロの妻

ペドリーロの妻の笑い話に戻ろう。1836年刊行の小話集から、

17・・・年の「通報」にペドリーロはお上の許しを得た上で次のような広告を載せた。—12月13日に我が馬が失せました、見つけ出した者には賞金として5ルーブリを差し上げます。さらに数日後に追加として、一同月25日に我が妻がいなくなりました、連れ戻した者には賞金として5グローシを差し上げます。[2—1]

18世紀の新聞「サンクト・ペテルブルグ通報」に、こうした広告が実際に掲載されたかどうか、現時点までの調査では不明である。彼の妻が他の男と駆け落ちをした、というテーマは後述のとおり重要である。それにしても、キリスト降誕祭の当日に彼女が逃亡した、というのは、神をも恐れぬ大胆な行為ということもあり、それでなくとも、話題性を含む。5ルーブリと5グローシという金額の多少も話のポイントである。1グローシは2コペイカ（1コペイカは100分の1ルーブリ）に相当（ただし1657—1838年のことで、1838—1917年には半コペイカ）するから、5ルーブリ対10コペイカ、すなわち500対10が馬と妻の価値比率である。

ペドリー口の妻は口やかましい女性だが、それでも彼は25年間も共に暮らしたので、友人たちが、銀婚式はやらないのかい、と尋ねた。答えていわく、友よ、もう5年待ってくれ、そうすれば、30年戦争を祝うことになるから。[2—26]<sup>(80)</sup>

ペドリー口は語った、愛は不思議なもの、驚くべきもの。結婚したときは、とても妻に惚れていたので、愛で食べてしまいたかったのに、今はそれができないのが残念だ。[2—27]<sup>(81)</sup>

妻が病気になったペドリー口に医者が訊ねた、奥さんは少し良くなったかね？ 今は何を食べているのかい？ 答えていわく、牛肉を食べている。医者が聞く、おいしそうに食べてるかい？ 道化は微笑みながら、ワサビをきかせたのを食べてるよ。[2—20]

「おいしそうに食べる」「食欲がある」с аппетитомと「ワサビをつけて食べる」с хреномは言葉遊びとなっており、しかも牛肉にワサビをつけて賞味することも伝えるが、それにとどまらない。ワサビの隠語からすれば、妻の浮気が暗示される。

プロシャ人のK・F・マンシュテインは、1727—44年にロシアに滞在し、その折の見聞を書き記した『ロシア覚書』に紹介された話はペドリー口の面目躍如たる活躍ぶりを物語っている。

ペドリー口の妻は見栄えの悪い女性だった。あるとき、ピロンがそのことを物笑いのネタにしようと思い、こう尋ねた、「おまえはヤギと結婚したという噂だが、本当かい？」すると勘のいい道化はこう答えた、「本当どころではありません。私の妻は妊娠していて、近く出産するはずでございます。どうか、閣下におきましては、御慈悲深くあられ、ロシアの慣習に従い妊婦のもとを御訪問されますように、そ



して生まれた赤児に贈り物を賜りますように」 ビロンは大笑いし、その通りにすると約束した。数日後、ペドリーロがビロンのもとにやってきて、喜色満面で、自分の妻のヤギが無事出産したので、件の約束を思い出したと告げたのだった。アンナ女帝はこの悪ふざけがとても気に入り、宮廷の人々全員に対し、道化のもとを訪問し、家族の幸福を祝ってくるよう命じた。そこで、ペドリーロはヤギを手に入れてリボンで飾り、ともにベッドに入って真面目な顔つきで祝福を受けた。言うまでもなく、訪問者は皆、道化の枕元にプレゼントを置くこととなり、おかげでペドリーロは一日で数百ルーブリもの金を手に入れることができた<sup>(82)</sup>。

19世紀後半の優れた習俗史家であるC・H・シュビンスキイは、この笑い話にたいして何の説明も加えていない。おそらくは、イタリア生まれの道化師が金儲けに巧みであり、その頓知によって短期間に大金持ちになったことをそのまま紹介したかったのだろう。だが、ペドリーロと妻のヤギについては、もう少しこだわってみる必要がある。それは、上で参照したロシア最大の図像学者であるロヴィンスキイが紹介する一枚の版画である。それは、ペドリーロに関する記事として、先述のトレメールなる人物がペドリーロへ送った戯れ歌の形式によるアイロニカルな新年の祝いに付されたとされ、本に挿絵として添えられた作品である（図21）。ちなみに、トレメールはペドリーロを追い落とし、彼に代わる宮廷の筆頭道化師の地位を得るべく奮闘したが、それは叶わなかった。

この絵に対するロヴィンスキイの記述を以下に引く。

ペドリーロの妻が愛人と馬車で行く。馬車にはヤギがつながれ、そのヤギにペドリーロその人がまたがり、バイオリンを弾いている。遠くにゴフランドの島の灯台が見える。その窓からラコスタが覗いている。彼はペドリーロに向かって「あっちへ行け」と叫んでいる。横に



リーロの肩書き中の「ヤギの角」なる言葉であろう。言うまでもなく、「角」は「妻に逃げられた男」の意味を持つ。次の話には、ペドリーロの妻のことが直接語られているわけではないが、明らかに彼の妻が暗示され、意識されている。

年寄の夫が浪費家で若い自分の美人妻のことをペドリーロと話題にして、こう言った、私の妻はきれいなんだ、だけど金がかかる。ペドリーロは答えて、金が、かかあーるのか！ うーむ！ どうしようもないな。[2—15]

年老いた旦那と若い妻あるいは悪妻、という組み合わせ、同時に、そうした若く美しい妻の自慢、同時に愚痴・不平あるいは「悪妻」告発というテーマは、おそらくはロシア民衆の想像力の中に古くから見られるものであり、多くのフォークロアを生んできた。しかも、ペドリーロの「金、かかあーるのか！」という部分はロシア語の *дорога* を翻訳であるが、刊行テキストでは *до-РОГ-А* (*por*「角」が大文字) となっていることを読むとき、そこには、妻に逃げられた男・夫であるペドリーロの姿が投影されるはずである。だとすれば、この個所は、寝とられ男である道化師の実感あるいは彼への共感を込めて読む（語る）べきであり、その意図に従って大文字表記となっているのではないのか。そのように考えると、普段はすぐさま、名言や名回答で聞き手（読み手）を唸らせるはずのペドリーロの「受け」の個所が納得と諦めの言葉で終わっているのも理解できる。

角のシンボリズムを具体的に検証するまでもなく、角は魔除け・厄除けのシンボルであり、力と豊穡・多作・多産をこめる護符としての機能を持つ。同時に、悪霊・デーモンとのつながりも合わせて、各種の仮装には欠かせない。その農耕呪術的機能は、そのままセクシャリティとも結びつく場合が多いから、角は男性原理を表象するものとして、性的能力ならびに「妻に逃げられた男」「不倫・浮気」までも連想させるのである<sup>(84)</sup>。

ペドリーロがすでにイタリアにいた時期に妻帯していたらしいことは先に述べた。それが本当かどうか、正確に判断できる資料はない。重要なことは、イタリアの妻が美人であったからこそ、ロシアの妻は不美人でなければならなかったことである。なぜか。

上で引用した小話の中のヤギの妻は、外見の醜さのシンボルであるばかりではなく、不釣り合いや不適応のシンボルでもある。昔話や儀礼＝遊戯歌謡、妖怪話や伝説においてヤギは人気があり、アレゴリカルな登場人物である。現代の民族学者である O・B・ペローヴァや A・B・クーロチキン<sup>85</sup>の記述によれば、ヤギとそれを人格化した仮面は年間歳時儀礼、特にクリスマス週間や謝肉祭週間におこなわれる儀礼で仮装した登場人物である。クリスマス・新年の「ヤギの連れ回し」や「ヤギの謝肉祭」は収穫や家畜の多産・豊穰を目的とした農耕ならびに牧畜の呪術と結びついていた。ペローヴァとクーロチキンは、ヤギの仮装の風習がウクライナとベラルーシに特徴的であり、ロシアでは少なく、西と中央と南の地域に見られるとする。しかしながら、B・И・チーチェロフと B・Я・プロップが正確に述べ、さらには Л・М・イーヴレヴァが具体的資料にもとづいて的確に指摘したとおり、ヤギの仮装とヤギの行進の行事は北ロシア（セーヴェル）にも残っていた<sup>(85)</sup>。さらにヤギは、悪霊（不浄の力）の分身であり、とりわけ「他者」（よそ者）に近い動物として理解されていた。宮廷内のメンタリティでも、民衆的観念の中でもペドリーロの妻は「よそ者」でなければならなかった。

「動物との結婚」「異類婚姻」のモチーフは、言うまでもなく、昔話や民衆の物語でもっとも一般的で、人気がある。そして、不浄な力としてのヤギとのコミュニケーションの危険度をできうる限り少ないものとするため、ロシア民衆文化の中でヤギには「ぶざまで」笑いを誘う動物としての役目が与えられた。ヤギの人格化した仮面と仮装は、数々の儀礼のみならず、民衆の演劇化された出し物に不可欠なものとなった。ヤギは、歳時ならびに家族サイクルの伝統的儀礼に欠かせぬ役回りを与えられ、多くの場合、

熊や放浪芸人とともに、民衆の見世物や演劇＝ブッフ、街頭の軽演劇＝ショーに参加した（熊とヤギがともに登場する多くの民衆版画を参照）。このことは、18-19世紀の民衆演劇とルポークばかりか、多くの歴史・民族学的データによっても確認できるとおりである。リボンで飾られたペドリーロの妻がベッドに横になっている様子が小話の中で語られる時、すぐさま民衆は、ヤギの仮装や行進を、そしてクリスマス週間や謝肉祭等のヤギが登場するさまざまな見世物芸の場面をまざまざと思い起こしたのである。

ペドリーロのイタリア人の妻はロシアに同行したのだろうか。かりに彼の二番目の妻がヤギであるとしたならば、角のあるヤギは、上で述べた民衆的な祭りの異教性を体現する存在であった。

#### c. 女性の中のアンナ

アンナは自分の周りに多数のおしゃべりな女性たちを集めた。このことは、19世紀後半以来、ほとんどのロシアの歴史家がこのことに言及して以来、これまでよく知られ、多くの歴史書でアンナに関する個所において紹介されてきた。例えば、1734年8月7日付けのC・A・サルトイコフ宛てアンナの書簡では、

モスクワの寡婦3・A・イヴァノヴァの処にペラゲーヤ・アフアナシエヴァ・ヴァゼムスカヤという公爵の娘が住んでいるので、ステパン・グレコフに彼女のことを訊ね、そのあと彼女を探し出し、私のもとへ送るように。彼女が驚かないように、私からの願いであると明らかにしてかまいません、そして道中、気をつけるように。私はこの娘を自分の慰めのためにほしいのです、聞くところでは、彼女は大変なおしゃべりだとのこと。ただしこのことは彼女には言わないように。当地では、おふざけで、私がニキータ・ヴォルコンスキイをゴリツインの娘と結婚させてやりました<sup>(86)</sup>。

ここに記されたイヴァノヴァなる女性にアンナが直接書き送った別の書簡によれば、おしゃべり好きなナスタシヤ・ノヴォクシヨノヴァなる老女がいたが、すでに死にかけているので、彼女に相当する「貧しい貴族の娘ないしは都市住民出の娘」を探してほしい、あるいは、ナスタシヤ・メシチェルスカヤやアニシヤ・メシチェルスカヤ公爵夫人のような女性の代わりがほしい、「せめて四人ほどでもよいから娘を」見つけ出すよう懇願している。アンナは自分の周囲に侍らせた女性たちに、一晩中、自分が満足するまでとにかくしゃべり続けさせた（歌わせた）。おしゃべり女性として名前が伝わっているのは、ノヴォクシヨノヴァ、フィラトヴナ、そして、ベズノーシカ母、ダリヤ・ドルガヤ、アクリナ・ロバノヴァ、エカテリーナ・コクシャ、バーバ・マテリナ等々<sup>(87)</sup>。

ところで、アンナによるおしゃべり女の探索に注目した歴史家は、時に、これら書簡の文章を引用するものの、あまり意味のないささやかなエピソードとして紹介し、あくまでアンナ個人の趣味の奇矯ぶりを指摘するのにとどまっている。例えば、クリュチエフスキイによれば、アンナは国内中から集めたこうした取巻きの女性たちとの他愛ないおしゃべりによって「自分の祖国からの疎外感」や「孤独感」を紛らわせた、というのである<sup>(88)</sup>。だが、それは説明としてあまりに常識に過ぎるのではないか。そのことをアンナの精神形成の過程をいくらか遡ることで考えてみる。

1693年にモスクワで生まれた彼女は、幼いころから母親からは嫌われ、孤独の中で愛情に飢えた時間を過ごしていた。当時のモスクワは、ピョートル大帝によるベテルブルグへの遷都によって「廃墟」の様相を呈しており、新たな国家の建設に邁進すべき男性は全員、新帝都へ移動を求められていたから、モスクワに残っていたのは、時代の動きから取り残された人々である。それは、モスクワ・ルーシの伝統に忠実な大貴族の子女たち、そして「脱落者」だった。アンナが娘時代を送ったイズマイロヴォは、当時モスクワ郊外に位置していた場所であり、そこは、多くの時代遅れの人間たちの「たまり場」となっていた観がある。その有様を19世紀後半の、

ある歴史家は次のように書き記している。

17世紀末にかけて、宮廷内の女性部分には、高位の篤信者たち—未亡人、老婆、娘—が出入りしていた。彼女たちは、プラスコーヴィヤ・フョードロヴナや皇女たちの地下階や屋敷のそばに住み、語り部の役目をはたしていた。そこには宗教行者もいたし、ありとあらゆる不具者—耳が聞こえぬ者、目が見えぬ者、手足がない者—もいた。この時代には普通な、あらゆる不具者への共感はプラスコーヴィヤ・フョードロヴナの時代に特に明確に現れたのであり、彼女はそうした性向を終世持ち続けた。高位の篤信者たちは服喪の（暗い色の）衣装を着ていたが、それは道化の男女—こびとたち—が、明るい色の服や、赤や黄の長靴や帽子を身にまとっていた多彩な身繕いと対照をなしていた。宮廷には、男女のこびとたちとともに、捕虜となっていた黒人男女や小さなカルムイク人男女も住んでいた。さらに宮廷内には、猿やオウム、その他の珍しい動物も飼われていた。宮廷には欠かせないオウム以外に、夜うぐいすやカナリア、ゴシキヒワやウズラ等あらゆる種類の鳥がいた<sup>(89)</sup>。

さらに、最初のロシア通史を著したB・H・タチーシチェフも、実際にイズマイロヴォを訪れた際の光景として「皇妃プラスコーヴィア・フョードロヴナの宮殿はその主の信仰深さのために、不具者や瘋癲やにせ聖人や道化たちの療養所になっていた。なかでもチモフェイ・アルヒーポヴィチという気違いじみた書記補が有名で、迷信家たちは彼を聖者だの予言者だのと言って敬っていた……」<sup>(90)</sup>と書き残している。イズマイロヴォには、プラスコーヴィヤの手で「劇場」も作られ、そこでの見世物にはピョートルも参加したというから、この郊外宮廷は崩壊と滅亡の予感と恐怖を基層に据えた、娯楽と演劇と笑いを具現化した空間であった。時代から疎外された実に多くの人々、瘋癲行者、放浪する聖者・預言者（真偽とも）をは



じめとして不具者や道化師や小人といった「異形」の人々（さらには動物まで）が巢食っていたが、多くの女性もそこにいた。

アンナの「経験」はここから始まった。彼女にとって、このモスクワ郊外の場所が「終生、子供時代の大好きな天国に似た一角」<sup>(91)</sup>であるというアニーシモフの言葉はきわめて的確である。

アンナの人生はつねに多くの女性に囲まれ、女性たちによって「支えられていた」のではないか。むしろ、これは直ちに反論を呼ぶはずである。彼女を政略結婚の道具として使ったピョートル、クールラントでの寵臣ベストゥージェフ、そしてクールラント期から始まり、ペテルブルグの女帝期の最大の寵臣ピロン、自分では予想だにできなかった彼女を皇帝の座に呼び寄せた貴族たち、さらにオステルマンをはじめとしてアンナ時代の政を牛耳った貴族たちのすべては男性であり、彼らがアンナに「操り人形」の役回りを与え、彼女の運命を決めたのだから。

にもかかわらず、アンナの生涯は、ときに嫉妬と憎悪的として、羨望とライバル心の対象として、ときに慰めと癒しの源泉として、多くの女性たちに取り囲まれ、そのことによって彼女の人格が形成されていったと言える。前節で見た道化師の妻たちにたいするアンナの気持ちと「強権発動」はその典型であろう。例えば、ヴォルコンスキイ夫妻への処遇の厳格さはその例である。貴族男性を道化師に「格下げ」したことの背景には、彼らのカトリック改宗への報復との見方は十分可能であり、必要であるが、この男性たち以上に妻に向けられたアンナの執拗なまでの関心は、明らかに異常さを含む。それを女性（あるいは妻）へのジェラシーと呼ぶのは、あまりに一般的に過ぎ、アンナの、きわめてアンビヴァレントな言動の説明として十分な説得力を持たない。それは女性にたいする本能的・感覚的な「とげとげしい感情」<sup>(92)</sup>であり、女性そのもの、あるいは誤解を恐れずに言えば、女性性にたいするアンナ自身の過度のこだわりと意識である。

17世紀後半に誕生した民衆版画（ルボーク）は、18世紀に突入すると同時に、時代のメディアの寵児となっていた。この民衆的表象は、同時代

の西欧演劇の場面や風俗のみならずロシアの宮廷・市中の風俗を鮮やかに切り取る有効な手段であったから、すでに紹介した楽師や道化師と並んで、新しい時代を迎えて社会の「表層」あるいは「前面」に躍り出たかのような女性の姿を好んで題材にすることとなった。屋敷内の台所で言いよる男性と「対等に」やりとりする女性（図22）、女性の側から積極的にアプローチする（「若い男を口説く」図23、「花婿選び」図24）といった女性優位的な場面がある一方で、浮気した妻を懲らしめる場面（図25、ただしこれは当時評判の演劇の場面から取ったモチーフ）もある他、屋外での男女の語らいの行方を覗きこむ道化師（？）が画面に登場するものもある（図26）。これらは、まさしく「女性の世界」<sup>(93)</sup>を表象すると同時に、女性が「主役」となった時代を表現する作品群と言える。アンナもこうした時代の影響から免れることはできなかったはずである。

母親からの愛の欠如、政略結婚と結婚直後の夫との死別、寵臣たちとの関係、再婚希望の不許可等といった、きわめて複雑なプロセスの中で形成されたアンナのメンタリティが、男性を道化にしたばかりか、特に妻たちへ強い憎悪を露わにし、おしゃべり女への癒しと慰みを狂乱的なまでに求



図 22

めた要因であることは、おそらく間違いない。しかしながら、彼女の性格のアンビヴァレントの背後には、自らの意思で社会の表層へ進出していこうとする同時代の女性がいた。その女性たちに向けたアンナのまなざしは、たとえ彼女自身は抑制がきかぬほどのジェラシーや憤怒にとらわれていたとしても、その底に見え隠れするのは、ロシア（ルーシ）の女性に共通するあるメンタリティの存在である。それは、他人のプライ

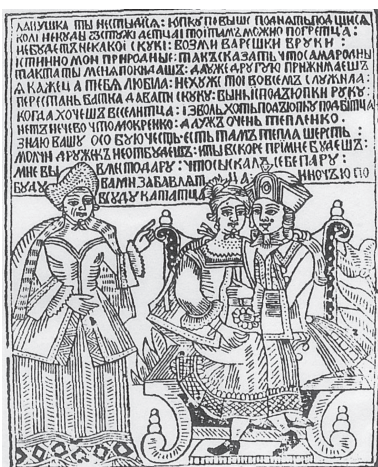


图 23

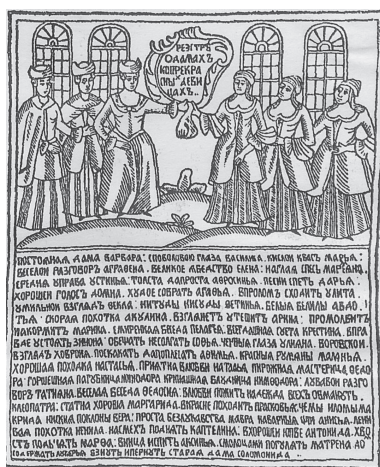


图 24



图 25



图 26

バシーへ深く介入しようとする「世話焼き」「おせっかい」という心的傾向ではなかったか。アンナが、道化師本人の意思を無視して結婚させたことについては、すでに述べた。彼女は「仲人女」たることを望み、そのために強大な権力を行使するまでに至った。むしろ、そこには、彼女自身の満たされなかった結婚（再婚）願望や実現されなかった幸福な家庭・夫婦関係への恨みと、それを裏返した形で周囲の者たちの婚礼遊戯へ投影させようとする、きわめて自虐的な面があったことは否めない。とはいえ、彼女がロシアに伝統的な世話焼き女性としてのメンタリティを持った彼女が仲人女性の役目を果たしたことはまぎれもない事実である。

同時代の宮廷ならびに都市住民の間で評判を取った世俗的寸劇のレパートリーに「花婿と仲人女」と題されたものがあり、これはそのまま、民衆版画の題材ともなっている（「新郎と仲人女」、図 27）。この作品の下部には、二人の掛け合いの言葉が読めるが、その中で、結婚適齢期にある男性（「私の鼻は大きなキュウリ」）が自己アピールをして世話をしてほしいと頼むのにたいして、女性いわく、「私をあてにしなさいな。あなたは満足するわ。だって私には惚れさせる魔法の根があるのだから。だけど、あなたの馬鹿ヅラを見たら、あなたには角のあるヤギを連れてくるわ」<sup>(94)</sup>。角とヤギについては、繰り返す必要はない。この芝居＝図像の仲人女性にアンナを重ねあわせることは、さほど困難ではないだろう<sup>(95)</sup>。

夫婦関係を面白おかしく語ること、あるいは、男性の側から見た妻の「不倫」や「浮気」、「悪妻ぶり」「不実さ」を話題にすることは、この時代の文化史上のもっともアクチュアルなテーマの一つであった。その背後にあるのは、こうしたテーマを持った世俗物語と演劇が陸続と登場し、都市町人を中心に急速に流行していった現象であり、そのことは、それまでの中世的（16 世紀に成立した「ドモストロイ」に代表される）男女・家族関係の「崩壊」を示していた。17 世紀半ば以降に加速化したこの潮流は、西欧からポーランド、ウクライナ、ベラルーシ経由で流れ込んだ騎士物語・世俗文学、世俗・風刺的寸劇等の影響を受け、それらと一体化しながら





図 27

らも、ロシアの新たな言語・演劇文化を誕生させていった。この時代に作られた物語、演劇、ルボーク、そして、後世に再生産されたとしても、この時代の人物・風俗を盛り込んだアネクドートの多くに、年老いた旦那と若い妻ないし悪妻のペア、同時に、そうした若く美しい妻の自慢、同時に愚痴・不平あるいは「悪妻」告発というテーマが見られるのはこうした理由による。もっとも、このテーマ自体は、おそらく古くからロシア民衆の中に見られたものだろう。しかし、17世紀半ば以降に誕生した世俗小説・物語や世俗風刺劇、そして18世紀に本格化する西欧からの同じく世俗的な幕間劇とも混交する中でロシアの文化は大きく発展していくことになった。多くの場合、妻たちが話題的となり、まるで脚光を浴びるかのように、彼女たちの言動が生き生きと語られる（演じられる）のは、まさしくこの時代精神を反映していたからである。道化師の妻がアネクドートの中でしきりと語られ、生き生きと活動する多くの女性たちがルボークの画面（さらに、物語や世俗演劇の舞台）に登場したことは偶然ではない。時代を演ずる「役者」と「演目」はすべて揃っていた。まして時の権力者

が女帝となれば「舞台」はおあつらえむきだった。

注

- (72) Курганов, 1997, с. 80.
- (73) Курганов, 1997, с. 85.
- (74) Курганов, 1997, с. 88.
- (75) Курганов, 1997, с. 90.
- (76) Шубинский, 1873, с. 65.
- (77) 訪問者の中には、チェルカーソフ、ブトゥーリン、パシュコフ、マヴリン等といった要人のほか、ピョートル大帝の有名な黒人アブラム・ハンニバルの名前がある。Шубинский, 1908, с. 40.
- (78) Успенский и Шишкин, 1990, с. 235-238 で、アンナがこのイタリア人妻の処遇について執拗なまでの指示を含むいくつもの書簡が紹介されている。アンナが他人の妻にそれほどまでに関心を示した証拠である。
- (79) シノドの判定も含めた、ゴリツインの度重なる結婚劇については Успенский, 1990, с. 235-236 に詳しい。さらに、四度の婚姻に対するロシア正教会の考え方については、16 世紀半ばに行われた宗教会議の議事録「ストグラフ」第 23 章「再婚および三度目の妻をめとる者について」を参照のこと。「二度目の結婚では加冠式が行われず、規則によって祈禱だけがなされ、三度目の結婚では聖なる規則により禁止事項をとまって祈禱だけが行われる。二度目の結婚をした者には、二年間の聖体拝領停止の<sup>エビテイミヤ</sup>懲罰を加える。だが若い者の場合には一年間でよい。三度目の結婚の場合には五年間聖体拝領を許さず、またすべての聖物に触れることを禁止する。四度目の結婚について言及されたことはないが、規則がこれを禁じている。不品行を行う者が、このような不法をなしているのである。四度目の結婚、すなわち野合をなしたる者は卑しめられる……」、さらにその後に大グレゴリオスの言葉として「……四度目は神への冒瀆であり、豚の生活にほかならない」の引用がある。「[「百章」試訳 (2)]」(中村喜和訳、一橋大学研究年報 人文科学研究 30, 1993 年) p. 23-24.
- (80) 結婚を 30 年戦争になぞらえる話はバラキレフ、ダコスタに関するアネクドートにもある。
- (81) ダコスタのアネクドート集 (1869 年) にも「後の祭り」のタイトルが与えられ、ほぼ同文章で収録されている (Курганов, 1997, с. 88)。
- (82) Шубинский, 1873, с. 66-67. 「ヤギのお産」のエピソードはラジェーチニ

コフ作『氷の家』にもある（第3部第7章）。

- (83) Ровинский, 2002, с. 219.
- (84) Плотникова, 2009.
- (85) Белова, 1999; Курочкин, 1993; Ивлева, 1994.
- (86) Шубинский, 1873, с. 62-63; Костомаров, 1876, с. 145-146; Павленко, 2002, с. 137-138. アンナはミタウ時代以降、女帝になってからも、親類縁者ならびに知人に多くの手紙を書いて送りつけている。一例をあげると、1739年に同じく C・A・サルティコフ宛ての書簡で、農民が歌っている「わたしたちポリヴァンツォヴォ村では、お馬鹿の主が篩でビールを飲んだ」で始まる唄があると聞いたので、書きつけて送るように指示している。その回答の唄のテキストが残っている（Лихачев и др., 1984, с. 262-263. ただし、同書の日本語訳には収録されていない）。テキストへの注釈によれば、この歌のヴァリエントが19世紀末の民謡集に見出されるという。アンナは最初期の「民謡収集家」なのかもしれない。
- (87) Шубинский, 1873, с. 62; Анисимов, 2002, с. 92. いずれもあだ名であることに注目。
- (88) Ключевский, 1910, с. 391.
- (89) Семевский, 1883, с. 12-13.
- (90) Татищев, 1962, с. 116.
- (91) イズマイロヴォに関しては、坂内知子, 2009を参照。タチーシチェフの記述によれば、このチモフェイは瘋癲行者であり、彼らにたいしては手に接吻するのがならわしだったが、それに従わなかったため、悪しき予言をされたという。タチーシチェフはこの偽宗教者を「道化」と呼んでいる。この「道化」шалунという言葉が18世紀前半に実際に活躍した「道化」とどのような関係にあるかについては、別に論じる必要がある。ちなみに、上記タチーシチェフの記述を引用した A・M・パンチェンコは、この「道化」という言葉が、アヴァクームの時代の瘋癲行者による「ふざけ」とつながるとする（Лихачев и др., 1984, с. 153）。
- (92) Ключевский, 1910, с. 391.
- (93) Лотман, 1994, ч. 1, гл. 2.
- (94) Ровинский, 2002, с. 68.
- (95) スタリコヴァは、アンナに「姐御・女親分」бой-баба, царица-баба を見ようとする。Старикова, 1995, с. 84. 仲人、世話焼き・親分肌の人物のい



ずれであろうとも、問題にすべきなのは、アンナに政治性・政治力がまったく欠けていた点である。

## IV. ペドリーロの時代

### 1. 文化史から見たアンナ期

アンナが強いリーダーシップと能力を持った政治家でなかったことは、あらためて指摘するまでもない。才能の点でピョートル大帝と比較すべくもないばかりか、自ら権力闘争を経て帝位に就いたわけではないから、なおさらだった。一方で、古きモスクワからの流れを組むドルゴルーキ家やゴリツィン家の勢力、そしてピョートル改革を継承しようとする「ピョートルの巢の雛たち」（メンシコフ、ヤグジンスキイ、ゴロフキンら）の圧力、そしてビロン、オステルマン、レーヴェンヴォリデ兄弟らバルト系ドイツ人からの強固な支持といった、いくつものベクトルが錯綜する状況下に、それらのきわめて微妙な権力バランスを舵取りすることは、アンナならずともこの上なく困難な課題であったはずである。ピョートル以後という混乱の中で、彼女自身はただただ、歴史の流れに放り込まれたのであり、国内外の政治・外交のすべては寵臣のビロン、オステルマンらに負う所が多かったのが実情であっただろう。したがって、彼女の治世の10年間については、これまでの大多数のロシア史研究にあっては、きわめてネガティブな叙述がなされ、わずかなスペースしか与えられてこなかったし、それはある意味で、当然と言えるだろう。有名なのはB・O・クリュチェフスキイの記述であり、彼によれば、彼女の治世は「われわれの歴史上で暗黒の一ページであり、その中でもっとも暗い汚点が女帝その人」<sup>(96)</sup>であった。

だが、文化史という視点から見直してみると、アンナの時代はいくらか違った様相を呈することになる。例えば、狭義の演劇史の面からとらえたとき、アンナ期は一つの転換期となる。すなわち、ロシア演劇史上、アン

ナの時期は、それ以前の為政者と宮廷のための閉鎖的な芝居、アレクセイ・ミハイロヴィチ帝期の「慰みの館」や演劇の見世物から、職業的な常設劇場の誕生と確立（エリザヴェータ帝の1756年8月30日の勅令による）への移行の時期にあたっていた。別の言い方をすれば、アンナ期は「演劇形成前」の時代、あるいは、ロシアのナショナルな職業演劇の完成段階「前夜」であった<sup>(97)</sup>。しかも、このことと並んで重要なのは、アンナの時代が、こうした狭義の演劇史から見た過渡期にとどまらなかったことである。中世以来の神秘劇（ミステリア）の伝統の中にあったロシアの宮廷は、17世紀後半にはオペラとイエズス会の宣伝劇たる「学校劇」を経験し、さらに主として都市民の中のアマチュア俳優による世俗演劇をも経験する中で、ロシアの近世演劇の始まりが宣言された。この分野で目覚ましい成果をもたらした演劇史家のЛ. А. Сафろновによれば、17世紀末には、学校劇、民衆劇、アマチュア劇の三者がロシア演劇の原点を作るべく準備を整えつつあり、それはバロック的色彩を帯びながらも、ポーランド、ウクライナ、ベラルーシ、そしてロシアを含むスラヴ的な枠組みで展開されていたのである<sup>(98)</sup>。ピョートルからアンナへの演劇文化の展開はこうした前史の中で理解されるべきである。そして、特にアンナの芝居好きが西欧を強く志向していたことも重要であり、それは単に彼女の個人的な好みの枠内にとどまるものではなかった。

建築の分野について言えば、D・ウォーンズは、アンナ帝時代の建築の優美さはつかのまのものであったとするが<sup>(99)</sup>、それでは十分な説明とはなっていない。たしかに、ペテルブルグの、特に帝都としての容貌とその輪郭の基礎固めは、18世紀後半にラストレリ父やカルロ・ロッシら外国出身の建築家によって行われたが、アンナの時代には、まさしくこの方向へ大きく舵が切られた。多くの社会・公共的建築物（例えば、教会や学校）の建設が計画・実行され、火事の高発も原因してそれまでの木造建築が次々と石造へと作りかえられていくのもアンナの時代だった。アンナの庇護の下、若きフランチェスコ・ラストレリは、ペテルブルグにアンナの

夏宮を、モスクワにアンネンゴフ宮殿（これは後にエカテリーナ二世によって取り壊された）を作り、1731年の第一次イタリアの一座の公演用に、赤の広場に「喜劇館」まで建設した<sup>(100)</sup>。さらに、ペテルブルグでのペトロパヴロフスク大寺院、クンストカーメラや海軍省の建設が完了したほか、聖母カザン寺院、聖シメオン教会、聖パンテレイモン教会等の代表的な建物も建てられた<sup>(101)</sup>。

このようにして作られたペテルブルグの主要な建物は、市内各所で計画された多くの式典や娯楽を引き立たせるのに大きな効果をもたらすことになる。娯楽と見世物、祭典とマスカラード、花火とイルミネーションをともなう祝祭の歴史から見れば、アンナの時代に、それらは目覚ましく発展した。ロシアの娯楽と祝祭の歴史からすれば、アンナの治世はきわめて重要な時期であった<sup>(102)</sup>。結論から言えば、新たな時代と新たな帝国の祝祭と娯楽はピョートル大帝期に始まり、アンナ・イオアンノヴナの時代に確立したと言うことができる。総じて、ピョートル大帝もアンナ・イオアンノヴナも演劇的出し物や祝祭を好んでいたが、その中身は異なっていた。そのことを演劇史家のΓ・З・モズルソンはきわめて正確に表現している、「社会的・政治的課題の実現のために自らの演劇を生み出したピョートル一世とは違って、アンナ・イオアンノヴナは、威信と自尊心を満足させ、娯楽のためにロシアの地でイタリア人の役者たちを目にするのを望んだ」<sup>(103)</sup>。さらに、この二人の権力者の娯楽・遊戯観の相違について指摘すべきことがある。それは、ピョートルにおける「西欧志向」が、アンナの場合には極端なまでに強固なものになっていたことである。それは彼女が置かれた環境による部分が大きい。すなわち、アンナが寡婦時代を送ったクールラントの土地柄と、そして、当時の宮廷内で「ドイツ派」の筆頭に位置していた寵臣ビロン、ならびに、ビロンと同じくバルト系ドイツ人ながらも、イタリア芸術家の庇護者であったK・Γ・レーヴェンヴォリデの影響がそれである。アンナが特に芝居を中心として、多くの演劇・見世物文化、祭典やマスカラード、イルミネーションや花火等に強く興味を

抱き、熱中したのは、彼女が西欧芸術の一大愛好者だったことによると考えられる<sup>(104)</sup>。

だが、先に引用したとおり、モスクワ郊外イズマイロヴォでの娘時代は彼女の精神形成にとって、決定的とも言える重要な役割を果たしていた。両親の出自ならびにモスクワでの少女時代の経験からすれば、アンナは純ロシア的（正確に言えば、古きルーシ的）メンタリティの持ち主であった。アンナが「骨の髄までロシア女性であった」<sup>(105)</sup>という指摘に間違いはない。だとすれば、娘時代以後、女帝になるまでのほぼ20年の人生に貫かれた非ロシア的＝西欧的な文物への憧れと嗜好は、彼女を「二重の本性」<sup>(106)</sup>の持ち主へとしていくことになったはずである。アンナの娯楽と祝祭への強い思いには、こうした「二重性」を見ないわけにはいかない。

すでに記したとおり、ロシアにおける道化ならびに道化師の歴史はピョートルの時期に形成され、アンナはその伝統を継承しただけでなく、その発展と定着を加速化した。彼女の死後、摂政として権力の座に就いたアンナ・レオポルドヴナは、「戯けの」仕事をただちに廃止した。その結果、街頭に現れるようになった宮廷道化師たちは社会へと拡散し、ペドリークをめぐる物語や小話は口伝えや「民衆版画」を通して人々の間で広まっていった。道化を禁止するアンナ・レオポルドヴナの勅令にも関わらず、道化師や「お馬鹿」はさらに長い間、宮廷の中で活動を続けたが（エカテリーナ二世時代のマトリョーナ・ダニーロヴァ、パーヴェル帝治世期のコズロフスキイ）、まさしくアンナ・イオアンノヴナの治世は、一方で、道化師＝戯け・お馬鹿の「黄金期」であると同時に<sup>(107)</sup>、他方で、古きモスクワ・ルーシの道化の最終段階でもあった。この道化師も含めた「馬鹿騒ぎ」と遊樂の面から見れば、アンナは「(多くのものを決定する出自の点で) 真にルーシの最後の女帝だった」<sup>(108)</sup>と言える。

女帝アンナの存在があったからこそ、ペドリークの活動は大きく展開した。その意味で、彼女の治世に、イタリア人バイオリニストで役者だったミーラがロシアの宮廷道化師ペドリークへ変身したことは、きわめて当然

であっただけでなく、幸運でさえあった。道化師と道化のカーニヴァルの空間は、女帝その人にとってのみ望ましいものであったのではなく、それは時代の要請であった。ロシアにおけるペドリーロの記憶は、歴史のたんなるエピソードではまったくなく、アンナ女帝時代の宮廷内ならびに民衆の間に確実に存在していた笑いの文化<sup>(109)</sup>を鮮やかに示す証拠だった。

ペドリーロとイタリア人の一座が舞台上ではイタリア語で演じ、それが翻訳を通してか、あるいは「崩れた」ロシア語によるものでは、観客が芝居のすべてを理解できなかったことは、この際、あまり重要ではない。むしろここで意味があるのは、ロシアの宮廷ならびに街頭に多言語的空間が誕生していたことであり、わからないイタリア語の言葉を介して、さらにジェスチュアとミミック、そして笑いを介してロシアの人々が、いまだ見たこともないイタリア（ピョートルもアンナも足を踏み入れることがなかった）、西欧文化の「揺籃」たるイタリアを受け取ろうとしていたこと、そしてそれをロシア風に理解したことである。А・Д・カンテミールやВ・К・トレジアコフスキイといった新しい時代の文学者がイタリアに対する傾倒ぶりを一度も失うことがなかったのは偶然ではない（特にトレジアコフスキイは科学アカデミーに勤務し、イタリアの喜劇やインテルメディアの創作ならびに翻訳に携わっていた<sup>(110)</sup>）。

#### 注

- (96) Ключевский, 1910, с. 390. ピョートル以後のロシアについての概略は、『世界歴史大系 ロシア史 2』（山川出版社，1994），p 57-63，また，土肥恒之『よみがえるロマノフ王朝』（講談社選書メチエ，2005）。後者には、アンナに関する「通説」への批判もなされているが、「治世の不人気という問題は残されている」と記されている。同氏によれば、近年の研究成果によって、ピロンよりもオステルマンに注目してこの時代を「オステルマン時代」とすべきという（オステルマンに関しては、田中良英「18世紀ロシア帝国における専制とドイツ人エリート」『ロシア史研究』84，2009）。アンナの全体像を本格的にとらえ直そうとする試みは、ピョートル以後のロシア史の専門家であるЕ・В・アニーシモフによって着手されたと言え

る。その「マニフェスト」は、彼の論文「アンナ」（『歴史学の諸問題』1993年4号）であり、成果は『アナン・イオアンノヴナ』（偉人伝シリーズ、2002）である。さらには、ジェンダー研究の視点からのアンナ「再考」が求められるが、それに関してはとりあえず、Пушкарёва Н. Л. Русская женщина: история и современность: история изучения «женской темы» русской и зарубежной наукой. 1800-2000. Материалы к библиографии. М., 2002. の関連項目を参照。アンナとピョートルはともに「外国人のロシア化」をめざし、ロシア化した外国人を取りこもうとしたが、アンナは文字通り「クレオール」としてのロシア帝国とその文化を目指したのであり、それを一応「確立」したのはドイツ出身のエカテリーナ大帝である、というアメリカの歴史家リチャード・ウォートマンの指摘が参考になる（Уортман, 2002, с. 125-126）。

- (97) Мордисон, 1981 и 1994; Старикова, 1995.
- (98) Сафронова, 1981.
- (99) Warnes, 1999, p. 117.
- (100) Старикова, 1995. 彼女によれば、木造の喜劇館はラストレリによるロシアで最初の劇場だったが、そこでは一回の公演もされなかった。
- (101) Реймерс, 2007, с. 156.
- (102) シュテリンの二巻著作集『ロシア芸術考』の編纂者 К・В・マリノフスキイのコメントによれば、花火とイルミネーションは18世紀においてもっとも充実した芸術形式であったという。アンナ期に、花火が上がったのは毎年新年前夜、誕生日、同一聖人の日、即位記念日である。例えば、1732年には、特別な「花火劇場」がワシーリエフスキイ島先端部に作られ、左側にクンストカーメラの建物、右側にペトロバーヴロフスク要塞を枠とする舞台としていた（Штелин, 1990, с. 239）。アンナ期の花火の全容とテーマについては、Зелов, 2002, с. 220-234.
- (103) Мордисон, 1994.
- (104) アンナ帝時代の娯楽と芝居の具体相については Старикова, 1988 に、その具体的資料は Старикова, 1995 に詳しい。また、Пезенти, 2008, с. 59-69 を参照。後者は、ロシアにおけるコメディ・デラルテ（インテルメディア）のレパートリーとそのシナリオの分析を目的とした優れたモノグラフだが、17世紀末から18世紀半ばまでのロシア演劇史の全体を手際よく概観している。

- (105) Старикова, 1995, с. 86.
- (106) Старикова, 1995, с. 86.
- (107) ロシアの道化史に関しては、最近刊行されたЛ・Б・ベルドニコフ著『道化師と頓知』（モスクワ、2009年）が参考になるが、今なお価値を失わないのは、ロヴィンスキイによる『ロシア民衆絵画史』（1881、1900年）の「道化と道化師」の章である。
- (108) Старикова, 1995, с. 86.
- (109) ピョートル前夜の文化を「笑いの復権」「笑いの名誉回復」としてとらえ、さらにはピョートルによる「遊興改革」を論証したА・М・パンチェンコの論考を参照（Панченко, 1984, с. 112-143）。彼は、ゴリコフの『ピョートル大帝の偉業』の再読を通して、ピョートルが仕掛けた新しい祭りや伝統的な、例えばスヴァートキにおける民衆の古い祭りの「対立」を記述する。さらに、Лихачев и др., 1984.（リハチョフ他『中世ロシアの笑い』中村喜和他訳）
- (110) Пезенти, 2008, с. 79-80.

## 2. ナロードの文化へのまなざし

アンナ・イオアンノヴナ時代の最後を飾る祭典は、すでに何度か触れてきた「氷の家、あるいは宮殿」と呼ばれる、きわめて奇妙な祝祭である（図 11, 28）。道化師ゴリツィンとカルムイク女性の婚礼をメインイベントとするこの祭りの評価は、きわめてネガティヴなものであり、ある意味で明快でさえある。すなわち、それはまさにアンナの度を過ぎた遊興心とおふざけ、あるいは「異常さ」や「非常識」を示すものであり、文字通り彼女の治世を象徴する事件として、ときに「ナルヴァあるいはアウステルリツに比べても、はるかに恥ずべきロシアの恥辱」<sup>(111)</sup>とまで呼ばれるものである。

しかし、演劇史家Л・М・スタリコヴァの詳細な資料探索とその考証は<sup>(112)</sup>、この祭りに対してまったく別の視点を提起する。彼女によれば、氷の宮殿における悪戯の婚礼の祝祭は、例外的なエピソードでも、女帝のきまぐれな個人的関心の表現でもなく、まして「ロシア的狂気」でもなかったという。



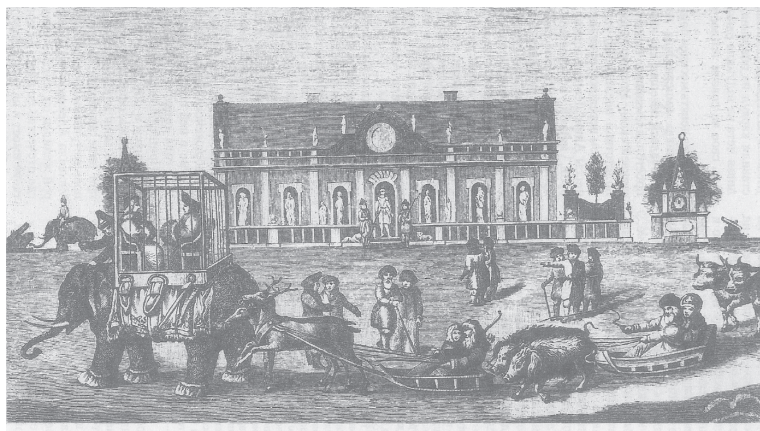


図 28



図 29

祭りの主役たる新郎であるゴリツインが道化師とされた事由に関しては、すでに述べた（結婚を繰り返したこと、重婚の科による懲罰を受けたこと、さらにカトリックへ改宗したこと等）、すでに年齢 50 を越えていた彼が「氷の家」の主役に選ばれたこと理由は、このような「前科」と、アンナのさらなる遊び心としての結婚・縁組願望が作用したことは言うまでもない

(図 29). ところで、「氷の家」における詩人トレヂアコフキイの「道化師としての役回り」を論じた B・A・ウスペンスキイと A・B・シーシキン は、この祭典の背後に、反カトリック宣伝の要素があったことを指摘する。ヨーロッパ（オランダ、フランス）でジャンセニズムに触れ、その考え方に共鳴した多くのフランス人やロシア人とのネットワークが、ロシア帰国後のトレヂアコフキイの活躍と挫折をもたらしたことを綿密な資料点検によって解明している<sup>(113)</sup>。その点に注目しなければ、この詩人が予告ぬきで「氷の家」祭典の「ゾウの館」に呼び出され、「見せしめ」として、新婚夫婦を讃える詩を作るよう要求されたほか、その後、見張りを付けられて二晩を過ごし、さらに道化の服装を着せられて祭典に参加したことの意味—彼のカトリックならびにジャンセニズムへの長年にわたる関心、ならびにカトリックの信仰それ自体という両者にたいするパロディーは理解できない、というのが共著者の結論である。この結論はきわめて説得力を持つ。とすれば、「氷の家」の馬鹿騒ぎには、ゴリツィンの改宗問題も含めて「宗教紛争的」側面<sup>(114)</sup>が基層として認められると言ってよい。

スタリコヴァの指摘によるまでもなく、この祭典の頂点の一つは、ロシア帝国内に住む諸民族の行進だった。この行進に参加を呼びかけられたのは、これまで、中央の宮廷・首都では名前とその存在こそ聞いたことがあったにせよ、彼らの文化や習俗に直接触れるのは初めてであるような多くの民族集団であった。その民族名と思われるのは、「モルドヴァ、チュヴァシヤ、チェレミサ、ヴォチャキ、トゥングースイ、ヤクートイ、チャプチャダールイ、オシャーキ、ムンガールイ、バシキールツイ、キンギースイ、ユナーキ、カントイシ、カラカルパーキ、白黒アラプイ、その他、ロシアの臣民（資料の表記をそのまま残した—T. B.）」<sup>(115)</sup>。これら諸民族の代表者を祭典の場に赴かせるべく、1739 年 12 月 27 日付け「陛下による命令」がロシア各地へ送付され、その一方で、これら民族の詳細な記述—衣装、乗り物、紋章、道具、楽器、食べ物、諸民族・人物・動物の記述ならびにスケッチ等—を行うよう、ロシア科学アカデミーに対して命じら

れたのである。

しかも、一堂に会したこれらの人々は「自然のマスカラード」で行進すること、すなわち、自分の土地で身につけている衣装、祭り等で演奏し披露する楽器や唄や踊りをともなう形で行うことが求められた（したがって、これまで宮廷内で行われた、例えばイタリア・ヴェネチアのマスカラードの「再現」を披露する場ではなかったことになる）。こうした趣向が生まれた背景には、ピョートル期に、ライプニッツの強い提言にもとづ



図 30

いて創設されたクンストカマー（ロシア語では、そのままクンストカーメラ）のコレクションの中に、すでに多くの民族衣装のコレクションが多数存在していたことにある、というのがクンストカーメラの歴史を記したT・B・スタニユコヴィチの考えである<sup>(116)</sup>。

祭典「氷の家」の場に立ち現れたのは、各地からの民族衣装と真の音楽や歌謡、踊りと所作等々をともなった多言語・多民族の帝国としてのロシアであった<sup>(117)</sup>。その意味で、一見奇妙に映るこの祭りは、多言語・多民族のロシアを体現していた。スタリコヴァが指摘するように、アンナはフォークロアに対してつねに関心を注いでいた<sup>(118)</sup>のであり、いまだ、民族学の博物館も、常設の展示もなかった当時、「氷の家」は独自の民族学ミュージアム、あるいは民族学資料とデータの展示場と呼ぶことができる（ちなみに、アンナはクンストカーメラ見学がお気に入りだった<sup>(119)</sup>）。

アンナ帝の時代には、ロシア民族学の本格的始動を宣言することとなる

П・С・パラスやИ・И・ゲオルギらの活動と仕事はいまだ生まれてはいなかった。にもかかわらず、それらの先駆と呼べる人物と仕事が確実に準備されつつあった。何よりも想起すべきは、「ロシア地理学の創始者」とされるИ・К・キリーロフと「ロシア歴史・民族学の父」とされるВ・Н・タチーシチェフであろう。前者はアンナ期に元老院秘書官長として勤務しながら、ロシア最初のカルトグラフィに従事し、多くの調査と地図作成計画を精査した後、全3巻から成る地図帳「全ロシア地図」の第一巻を刊行（1734年）している<sup>(120)</sup>。一方、タチーシチェフは論文「全シベリアの地理的記述」（1736年）ならびに「ロシア歴史・地理の著作に関する提案」（1737年）「ロシア、あるいは現在の呼び名ロシア」（1739年）<sup>(121)</sup>を書き、さらにロシアの国土の詳細かつ多面的な地誌作成に向けた「アンケート質問集」（1734—37年、92さらに198問から構成される）を編纂している。特に最後の「質問項目」は、Г・Ф・ミルレルが行った調査遠征（1733—43年、シベリア北部歴史・民族調査、ならびに第二次カムチャトカ）の質問集の基礎となっただけでなく、ミルレル自身が1740年に作成したプログラムにも大きな影響を与えたとされる。さらに注目すべきなのは、地誌、歴史、民族、宗教等に関する言葉をアルファベット順に配列した「ロシア歴史・地理・政治・民間レキシコン」（Кまでで未完）であろう<sup>(122)</sup>。これらの著作に一貫して窺えるのは、当該の土地の自然条件のみならず、土地名、土地区分、言語、宗教、民族等にまで及ぶ記述が方法として自覚されていることであり、その点で、彼の仕事は、それまで存在していた外国人によるロシア（ルーシ）叙述<sup>(123)</sup>とは明確に異なっていた。

多言語性と多民族性という二つの基軸からなる帝国なるものの認識の成立過程は、ピョートル大帝によって着手され、18世紀後半のエカテリーナ二世の時代に一応の完成を見ることとなる。それは、民族・民衆、そして国民としてのナロードの実体が確認され、言説としてのナロードの理解をめぐって国内の激しい議論が展開されていく過程に該当していた。アンナ帝の10年は、ピョートルからエカテリーナ大帝へのまさに過渡期と呼

ぶことができるのであり、帝国ならびにナロードの認識へと連なる仕事が準備され、そのための学問的視点が今まさに形成されようとしている時代であった。

遊戯と娯楽に満ちあふれたアンナ・イオアンノヴナ時代のロシアにペドリローロが登場し、活躍したことは、たんなる偶然でもエピソードではなく、一大文化史的事件であった。上流社会のみならず民衆にまで及ぶ、ロシア社会の広範な文化層の中に多くの記憶を留めることになったイタリア生まれの道化師は、まさしくピョートル大帝の治世直後の時代精神がもたらした賜物であったと言える。その意味で、18世紀ロシア史の研究者А・Б・カメンスキイの「10年間続いたアンナ治世の意義は、何よりもまず、この時期に古いロシアから新しいロシアへの最終的な移行が完了したことにある<sup>(124)</sup>」という指摘はきわめて示唆的である。

注

(111) これはА・クジミン『タチーシチェフ』（「偉人伝」シリーズ、モスクワ、1981、p.175）にある言葉だが、それを引用したゲルレルも全体としては同様のアンナ評価である（Геллер, 2001, c.23）。

(112) Старикова, 1995.

(113) Успенский и Шишкин, 1990. 探偵小説に比すべき明快かつ魅惑的な論証を行うこの論文は文化史研究のお手本とも言える仕事である。「氷の家」については、さらに二人の共著論文「1740年ペテルブルグにおける“馬鹿の結婚式”」があり、これはУспенский, 2008に収録されている。ここには、詩人が作らされた「結婚したお馬鹿のお二人、おめでとう」で始まる戯れ歌の言葉に対する詳細な注釈がある。ちなみに、この戯れ歌は「訓戒」「説教」を意味するポーランド語 *kazanie* から借用されて *казанье* と名付けられたというが、明らかに、カトリック教国ポーランドとその教えを想起しつつ、パロディ化する一方で、詩人その人に対する「罰」*наказание*（ただし、これはキリスト教の懲罰ではなく世俗的な罰）を意識させる言葉であろう。

(114) ミタウ（現イェルガヴァ）に現存する聖アンナ教会はラストレリの作。

クールラントのトボス（ポーランドとの距離も含めて）からすれば、この教会は文字通りカトリックの大勢の中に囲まれて作られたはずである。アンナの宗教観については、例えば、Титлинов, Б. В. Правительство имп. Анны Иоанновны в его отношениях к православной Церкви. Вильна, 1905（未見）。ジャンセニズムも含むカトリックとの関係については、上記ウスベンスキイとシーシキンの論文を参照。さらに、アンナの瘋癲行者への対応についても考慮すべきであろう。瘋癲行者への迫害と禁止勅令については、取りあえず Лихачев и др., 1984, с. 152-153.

- (115) Станюкович, 1953, с. 76. この民族名リストに見える「アラープ」は黒人、18-19 世紀の宮廷や貴族屋敷で仕えた肌の黒い僕婢の総称。ブロンズ像「アンナと黒人の子供」（図 30）は、バルトロメオ・カルロ・ラストレリ晩年の傑作（高さ、幅、奥行きとも約 2.2 メートル、1741 年に完成）だが、バロックと初期ロココ様式の結合の中に、権力者とその「取巻き」の双方の間に存在する、可笑しげだが、崇高なまでの関係性が表象されているように思われる。
- (116) Станюкович, 1953, с. 76. 祭で使われた衣裳は一部が破損状態で返却されたが、1747 年のクンストカーメラの火事で消失した。ライプニッツとクンストカーメラの関係については、ホルスト・ブレーデカンブ『モナドの窓』（原研二訳、産業図書、2010）を参照。
- (117) 上で言及したトレヂヤコフスキイが「氷の家」を歌った戯れ歌にも、民族名としてモルドヴァ、チュヴァシヤ、サモエードイ、楽器としてバラライカ、グドーク、ローシキ、ヴォルインキなどの言葉が使用されている。Успенский, 2008, с. 536.
- (118) Старикова, 1995, с. 78 и 101. 18 世紀における「ナロードの発見」をめぐる言説史（この問題に関する「古典」的著作は、やはり Rogger, 1960 である）にとってアンナの意味は、予想外に大きなものがある。上記、注 86 を参照。
- (119) ベトロフによれば、アンナが最初にクンストカーメラを訪問したのは 1732 年 3 月 7 日である（Петров, 1885, с. 197）。「Санкт・петелбург通报」1733 年 5 月 31 日の記事によれば、「昨日、女帝陛下はレートニイ・サードを散策され、そこで行われていた熊狩りを御覧になられた。その後、帝室クンストカーメラへ赴かれ、1726 年にコラから運ばれてきて、今ではそこに保管されている鯨の骨を御覧になり、その全体の組成



につき質問された」(Старикова, 2000, с. 116 より)とある。さらに、アメリカのロシア文学研究者エリフ・バトゥマンの言葉, 「アンナによって上演されたどの奇怪なスペクタクルも, 奇怪さはほんのわずかだけ劣るピョートル大帝によるスペクタクルをグロテスクに重ね合わせたものだとすれば, おそらくクンストカーメラは氷の家の原風景だった」(Batum, 2010, p. 202) も参照のこと。これは, 2006 年冬にベテルブルグで開催された祭典「氷の家」へ参加した際の見聞にはじまって, ラジェーチニコフ『氷の家』を西欧で最初に「受容」したイギリス詩人ウィリアム・クーバー「タスク」, トーマス・マンらの作品にまで論及する興味深い論考である。

- (120) 三上正利「キリーロフの生涯とその著『全ロシア国の繁栄状態』」『窓』30 (1979), さらに豊川, 2006 を参照。
- (121) Татищев, 1950; Станюкович, 1978, с. 24-26.
- (122) Татищев, 1979, с. 153-360. そこには, 例えば「叫び女(女性シャーマン)」кликунのような民俗語彙も収録されている。タチーシチェフは, アンナが皇帝の座に就いた後にこうした「語彙集」編纂を目的としたプロジェクトを進言している。ちなみにアンナとタチーシチェフは姻戚関係(アンナの母プラスコーヴィヤが大貴族タチーシチェフの孫娘)にあった(Лихачев и др., 1984, с. 153. 日本語訳, p. 274)。
- (123) Рое, 2000. 西欧社会で蓄積されてきたロシア旅行記をエスノグラフィのテキストとして読み, これまでの西欧におけるルーシ・ロシア像の再構築を試みた画期的な仕事である。
- (124) Каменский, 1999, с. 157.

\* 本稿は, 最初にロシア語で書かれ, *Mediterranean World XX* (Published by the Mediterranean Studies Group, Hitotsubashi University, Tokyo, 2010) に発表された論文 *Метаморфозы образа одного итальянского музыканта в русской народной культуре* に大幅に加筆したものである。

#### Библиография

Адамка Педрилло, 1836—Умные, острые, забавные и смешные анекдоты Адамки Педрилло, бывшего шутом при дворе императорицы Анны Иоанновны во время регенства Бирона. Ч. 1-2. М., 1836.



- Андросов, 2003—Андросов С. О. Русские заказчики и итальянские художники. СПб., 2003.
- Анекдот, 2003—Русский литературный анекдот конца XVIII–начала XIX века. Сост. и примеч. Е. Курганова и Н. Охотина. М., 2003.
- Анисимов, 1986—Анисимов Е. В. Россия в середине XVIII века. Борьба за наследие Петра. М., 1986.
- Анисимов, 1994—Анисимов Е. В. Россия без Петра 1725–1740. СПб., 1994.
- Анисимов, 1997—Анисимов Е. В. Женщины на Российском престоле. СПб., 1997.
- Анисимов, 2002—Анисимов Е. В. Анна Иоанновна. М., 2002.
- Балакирев, 1889—Анекдоты, шутки и выходки Балакирева, придворного шута Петра Великого. М., 1889.
- Безвременье, 1991—Безвременье и временщики. Воспоминания об «эпохе дворцовых переворотов» (1720-е—1760-е годы). Л., 1991.
- Белова, 1999—Белова О. В. Коза. //Славянские древности. Т. 2. М., 1999.
- Бердников, 2009—Бердников Л. И. Шуты и острословы. Герои былых времен. М., 2009.
- Беспятых, 1997—Беспятых Ю. Н. Петербург Анны Иоанновны в иностранных описаниях. СПб., 1997.
- Бутир и Порфильева, 1998—Бутир Л. М. и Порфильева А. Л. Мира. //Музыкальный Петербург. Энциклопедический словарь. Т. 1 (XVIII век). Книга 2. СПб., 1998.
- Веселая старина, 1824—Об увеселениях Русского двора при Петре 1. О первых балах в России. Калининград, 2005.
- Власова, 2001—Власова З. И. Скоморохи и фольклор. СПб., 2001.
- Всеволодский-Гернгросс, 1912—Всеволодский-Гернгросс В. Н. Театр в России при Императрице Елизавете Петровне. М., 2003.
- Всеволодский-Гернгросс, 1913—Всеволодский-Гернгросс В. Н. Театр в России при императрице Анне Иоанновне. СПб., 1913.
- Всеволодский-Гернгросс, 1936—Всеволодский-Гернгросс В. Н. Краткий курс истории русского театра. М., 1936.
- Всеволодский-Гернгросс, 1957—Всеволодский-Гернгросс В. Н. Русский театр от истоков до середины XVIII в. М., 1957.

- Геллер, 2001—*Геллер М. Я.* История Российской империи. В двух томах. Т. 2, М., 2001.
- Голдовский, 1994—*Голдовский Б.* Летопись театра кукол в России XV–XVIII веков. М., 1994.
- Гончарова, 2004—*Гончарова О. М.* Власть традиции и «новая Россия» в литературном сознании второй половине XVIII века. СПб., 2004.
- Даль-Бодуэн, 1911–1914—*Даль В. И.* Толковый словарь живого великорусского языка. Изд. 4-е, испр. и значительно доп. Т. 1–4. Токио, 1984.
- Жабрева, 2000—*Жабрева А. Э.* Маскарады и маскарадный костюм в рукописных и опубликованных материалах XVIII века. // Маска и маскарад в русской культуре XVIII–XX веков. М., 2000.
- Живов, 1996—*Живов В. М.* Язык и культура России XVIII века. М., 1996.
- Зарин, 1913—*Зарин А. Е.* Царские развлечения и забавы за 300 лет. Л., 1991.
- Захарова, 1998—*Захарова О. Ю.* История русских балов. М., 1998.
- Захарова, 2000—*Захарова О. Ю.* Русские балы и конные карусели. М., 2000.
- Захарова, 2001—*Захарова О. Ю.* Светские церемониалы в России XVIII–начала XX в. М., 2001.
- Захарова, 2003—*Захарова О. Ю.* Власть церемониалов. М., 2003.
- Зелов, 2002—*Зелов Д. Д.* Официальные светские праздники как явление русской культуры конца XVII–первой половины XVIII века. М., 2002.
- Ивлева, 1994—*Ивлева Л. М.* Ряженье в русской традиционной культуре. СПб., 1994.
- Исторический, 1996—Исторический лексикон. XVIII век. М., 1996.
- Каменский, 1999—*Каменский А. Б.* Российская империя в XVIII веке: традиции и модернизация. М., 1999.
- Келлер, 2001—*Келлер Е. Э.* Праздничная культура Петербурга. СПб., 2001.
- Ключевский, 1910—*Ключевский В. О.* Курс русской истории. Ч. 4. М., 1910. (В · О · Крючьевский 『ロシア史講話 4』 (八重樫喬任訳) 恒文社, 1983)
- Костомаров, 1876—*Костомаров Н. И.* Русская история в жизнеописаниях ее главнейших деятелей. Кн. 3. Вып. 7. М., 1992.

- Кошелев, 1994—*Кошелев В. В.* Скоморохи и скоморошья профессия. СПб., 1994.
- Краснобаев, 1983—*Краснобаев Б. И.* Русская культура второй половины XVII—начала XIX в. М., 1983.
- Кузьмина, 1958—*Кузьмина В. Д.* Русский демократический театр XVIII века. М., 1958.
- Курганов, 1997—*Курганов Е.* Анекдот как жанр. СПб., 1997.
- Кургатинов, 1996 (авт.-сост.) —Русская старина: Путеводитель по XVIII веку. М., 1996.
- Курочкин, 1993—*Курочкин А. В.* Коза. //Восточно-славянский фольклор. Словарь научной и народной терминологии. Минск, 1993.
- Лажечников, 1835 и 1858—*Лажечников И. И.* Ледяной дом. Саранск, 1985.
- Лифарь, 1945—*Лифарь С.* История русского балета от XVII века до «русского балета» Дягирева. Париж, 1945.
- Лихачев и др., 1984—*Лихачев Д. С. Панченко А. М. Поньрко Н. В.* Смех в древней Руси. Л., 1984. (D・S・リハチヨフ, A・M・パンチェンコ, N・V・ボスイルコ『中世ロシアの笑い』(中村喜和・中沢敦夫訳)平凡社, 1989)
- Лотман, 1994—*Лотман Ю. М.* Беседы о русской культуре. Быт и традиции русского дворянства. СПб., 1994. (ユーリー・ロートマン『ロシア貴族』(桑野隆・望月哲男・渡辺雅司訳)筑摩書房, 1997)
- Мордисон, 1981—*Мордисон Г. З.* История тетрального дела в СССР. Русский театр XVIII века 50-70-е годы. Л., 1981.
- Мордисон, 1994—*Мордисон Г. З.* История тетрального дела в России. Часть 1-2. СПб., 1994.
- Музыкальный, 1996-2002—Музыкальный Петербург. Энциклопедический словарь. Синхронические таблицы. XVIII век. Кн. 1-5. СПб., 1996-2002.
- Огаркова, 2004—*Огаркова Н. А.* Церемонии, празднества, музыка русского двора. XVIII-начало XIX века. СПб., 2004.
- Одесский, 1999—*Одесский М. П.* Очерки исторической поэтики русской драмы, Эпоха Петра 1. М., 1999.
- Островский, 2000—*Островский О. Б.* История художественной культуры Санкт-Петербурга. СПб., 2000.
- Павленко, 2002—*Павленко Н. И.* Анна Иоанновна. Немцы при дворе. М.,

2002.

- Панченко, 1982—*Панченко А. М.* Русская культура в канун Петровской реформы. Л., 1984.
- Пезенти, 1997—*Пезенти М. К.* Комедия масок в России: первые связи с Италией, зарождение нового увлечения. // *Europa Orientalis* 16, 1997-1.
- Пезенти, 2008—*Пезенти М. К.* Комедия дель арте и жанр интермедии в русском любительском театре XVIII века. СПб., 2008.
- Перец, 1895—*Перец В. Н.* Кукольный театр на Руси. СПб., 1895.
- Петр Великий, 2007—Петр Великий. Сост. и ред. Е. В. Анисимов. М., 2007.
- Петров, 1885—*Петров П. Н.* История Санкт-Петербурга. М., 2004.
- Петровская и Сомина, 1994—*Петровская И. Ф., Сомина В. В.* Театральный Петербург. СПб., 1994.
- Петрухинцев, 2001—*Петрухинцев Н. Н.* Царствование Анны Иоанновны: формирование внутриполитического курса и судьбы армии и флота. СПб., 2001.
- Плотникова, 2009—*Плотникова А. А.* Рог. // *Славянские древности*. Т. 4. М., 2009.
- Пумпянский, 1941—*Пумпянский Л. В.* Тредиаковский. // *История русской литературы*. Т. 3 М.-Л., 1941.
- Пыляев, 1889—*Пыляев М. И.* Забытое прошлое окрестностей Петербурга. СПб., 1994.
- Пыляев, 1897—*Пыляев М. И.* Старое жительство. СПб., 1990.
- Пьесы, 1976—Пьесы любительских театров. М., 1976.
- Реймерс, 2007—*Генрих фон реймерс* Санкт-Петербург в конце своего первого столетия. (пер. с нем. А. Д. Сыщикова) СПб., 2007.
- Ровинский, 1881—*Ровинский Д. А.* Русские народные картинки. Т. 1-5. СПб., 1881.
- Ровинский, 1886-1889—*Ровинский Д. А.* Подробный словарь русских гравированных портретов. Т. 1-4. СПб., 1886-1889.
- Ровинский, 1900—*Ровинский Д. А.* Русские народные картинки в двух томах. СПб., 2002.
- Сафронова, 1981—*Сафронова Л. А.* Поэтика славянского театра XVII-XVIII вв. М., 1981.

- Сафронова, 2007—*Сафронова Л. А.* Российский феатрон: московский любительский театр XVIII в. М., 2007.
- Семевский, 1883—*Семевский М. И.* Царица Прасковья. М., 1989.
- Семенова, 1982—*Семенова Л. Н.* Очерки истории быта и культурной жизни России. Первая половина XVIII в. Л., 1982.
- Семенова, 1998—*Семенова Л. Н.* Быт и население Санкт-Петербурга (XVIII век). СПб., 1998.
- Синдаловский, 2008—*Синдаловский Н. А.* Групповой портрет в фольклоре Санкт-Петербурга. М., 2008.
- Соловьев, 1962-66—*Соловьев С. М.* История России с древнейших времен. Кн. 1-15. М.
- Станюкович, 1953—*Станюкович Т. В.* Кунсткамера Петербургской Академии Наук. М.,-Л. 1953.
- Станюкович, 1978—*Станюкович Т. В.* Этнографическая наука и музеи. Л., 1978.
- Старикова, 1988—*Старикова Л. М.* Театральная жизнь старинной Москвы. М., 1988.
- Старикова, 1989—*Старикова Л. М.* Новые документы о деятельности итальянской труппы в России в 30-е гг. XVIII в. и русском любительском театре этого времени. //ПКНО. 1988. М., 1989.
- Старикова, 1995—*Старикова Л. М.* Театральная жизнь России в эпоху Анны Иоанновны. Документальная хроника 1730-1740. Выпуск 1. М., 1995.
- Старикова, 1996 Иностранные кукольники в России в первой половине XVIII в. //ПКНО. 1995. М., 1996.
- Старикова, 1997—*Старикова Л. М.* Театр в России XVIII века. М., 1997.
- Старикова, 2000—*Старикова Л. М.* Штрихи к портрету императрицы Анны Иоанновны. //Развлекательная культура России XVIII-XIX вв. Очерки истории и теории. СПб., 2000.
- Старикова, 2003—*Старикова Л. М.* Театральная жизнь России в эпоху Елизаветы Петровны. Документальная хроника 1741-1750. Выпуск 1. М., 2003.
- Старикова, 2005—*Старикова Л. М.* Театральная жизнь России в эпоху

- Елизаветы Петровны. Документальная хроника 1741–1750. Выпуск 2. М., 2005.
- Татищев, 1950—*Татищев В. Н.* Избранные труды по географии России. М., 1950.
- Татищев, 1962—*Татищев В. Н.* История российская. Т. 1. М.-Л., 1962.
- Татищев, 1979—*Татищев В. Н.* Избранные произведения. Л., 1979.
- Тихонравов, 1861—*Тихонравов Н. С.* Начало русского театра. //Сочинения Н. С. Тихонравова. Т. 2. М., 1898.
- Токарев, 1966—*Токарев С. А.* История русской этнографии. М., 1966.
- Уортман, 2002—*Уортман Р. С.* Сценарии власти. Т. 1. М., 2002.
- Успенский, 1985—*Успенский Б. А.* Из истории русского литературного языка XVIII–начала XIX века. Языковая программа Карамзина и ее исторические корни. М., 1985.
- Успенский, 2008—*Успенский Б. А.* Вокруг Тредиаковского. Труды по истории русского языка и русской культуры. М., 2008.
- Успенский и Шишкин, 1990—*Успенский Б. А. и Шишкин А. Б.* Тредиаковский и янсенисты. //Символ, № 23. Париж, 1990.
- Фаминцын, 1889—*Фаминцын А. С.* Скоморохи на Руси. СПб., 1889.
- Храневич, 1902—*Храневич К.* Педрилло. //Русский биографический словарь. Т. 12. СПб., 1902.
- Черная, 1999—*Черная, Л. А.* Русская культура переходного периода от Средневековья к Новому времени. М., 1999.
- Чижова, 2002—*Чижова И. Б.* Пять императриц. Петербургская культура XVIII века. СПб., 2002.
- Штелин, 1990—*Штелин Я.* Записки Якоба Штелина об изящных искусствах в России. М., 1990.
- Штелин, 1935—*Штелин Я.* Музыка и балет в России XVIII века. СПб., 2002.
- Шубинский, 1873—*Шубинский С. Н.* Придворный и домашний быт императрицы Анны Ивановны. //Исторические очерки и рассказы. М., 1995.
- Шубинский, 1908—*Шубинский С. Н.* Княгиня А. П. Волконская и ее друзья. //Исторические очерки и рассказы. М., 1995.

- Юхт, 1985—*Юхт А. И.* Государственная деятель В. Н. Татищева в 20-х—  
начале 30-х годов XVIII в. М., 1985.
- Яблочков, 2003—*Яблочков М.* История дворянского сословия в России.  
Смоленск, 2003
- Якобсон, 1915—*Якобсон Р.* Влияние народной словесности на Тредиа-  
ковского. //Selected writings, IV. Hargue, Paris. 1966.
- Batuman, 2010—*Batuman E.* The House of Ice. //The Possessed. N. Y. 2010.
- Cracraft, 2003—*Cracraft, J.* The Revolution of Peter the Great. Harvard UP.  
2003.
- Kelly, 1990—*Kelly, C.* Petrushka. The Russian Carnival Puppet Theatre. Cam-  
bridge UP. 1990.
- Poe, 2000—*Poe, M.* A People Born to Slavery. Russia in Early Modern European  
Ethnography, 1476-1748. Cornell UP. 2000.
- Poe, 2003—*Poe, M. T.* The Russian Moment in World History. Princeton UP.  
2003.
- Raeff, 1966—*Raeff, M.* Origins of the Russian Intelligentsia. The Eighteenth-Cen-  
tury Nobility. N. Y.
- Rogger, 1960—*Rogger, H.* National Consciousness in Eighteenth-Century Russia.  
Harvard UP. 1960
- Warnes, 1999—*Warnes, D.* Chronicle of the Russian Tsars. The Reign-by-Reign.  
Thames and Hudson. 1999.
- Wortman, 1995—*Wortman, R. S.* Scenarios of Power. Princeton UP. 1995.
- 阿部, 1996—阿部重雄『タチーシチェフ研究』刀水書房, 1996.
- 豊川, 2006—豊川浩一『ロシア帝国民族統合史の研究』北海道大学出版会, 2006.
- 坂内徳明, 2006a—坂内徳明『ルボーク——ロシアの民衆版画』東洋書店, 2006.
- 坂内徳明, 2006b—坂内徳明「ドミトリイ・ロヴィンスキイとロシア民衆版画  
(ルボーク) 研究」『人文科学研究』43 (一橋大学研究年報).
- 坂内徳明, 2011—坂内徳明「「氷の館」——ロシア式結婚狂想曲」『言語社会』5  
(一橋大学 大学院言語社会研究科).
- 坂内知子, 2010—坂内知子「ロシア中世庭園の終焉——帝室イズマイロヴォ領地  
屋敷の変遷」『人文・自然研究』4 (一橋大学 大学教育開発センター).
- ラエフ, 2001—ラエフ, M.『ロシア史を読む』(石井規衛訳) 名古屋大学出版会,  
2001.



## 図版一覧

- 図 1 「赤鼻のファルノス」(木版画)
- 図 2 「アンナ・イオアンノヴナ肖像画」(ヤコボ・アミゴーニの絵によるヴァグネルの版画)
- 図 3 「1710 年アンナの婚礼」(古版画)
- 図 4 「アンナ即位式記念花火」
- 図 5 「アンナ宮廷内のマスカラード」
- 図 6 「コメディア・デラルテの役者」(木版画)
- 図 7 「宮中のコメディア・デラルテ上演」(木版画)
- 図 8 「作曲家アライヤ」
- 図 9 「ピョートルの小人の婚礼」(古版画)
- 図 10 「アンナ宮廷の道化師」(ヴァレリィ・ヤコービ作, 1872 年)
- 図 11 「氷の家」見取り図, 「同」化粧室と寝室
- 図 12 「コメディア・デラルテの登場人物ベトリーロ」
- 図 13 「エルンスト・ピロン肖像画」
- 図 14 「トレジアコフスキイ肖像画」
- 図 15 「ピョートル以来の道化師バラキレフ」
- 図 16 「楽師ファルノス」(銅版画)
- 図 17 「ファルノスとピガーシヤのおしゃべり」(木版画)
- 図 18 「踊り手と放浪芸人」(木版画)
- 図 19 「道化師ゴノス」(木版画)
- 図 20 「道化師ダコスタ」(古版画)
- 図 21 「道化師ベドリーロの仕業」(トレメールの著書の挿絵)
- 図 22 「女性に近づく」(木版画)
- 図 23 「若い男を口説く」(木版画)
- 図 24 「花婿選び」(木版画)
- 図 25 「妻を懲らしめる」(木版画)
- 図 26 「男女の交際の行方」(木版画)
- 図 27 「花婿と仲人女」(木版画)
- 図 28 「氷の家での婚礼と行進」(古版画)
- 図 29 「氷の家での婚礼」(ヴァレリィ・ヤコービ作, 1878 年)
- 図 30 「アンナと黒人の子供」(バルトロメオ・ラストレリ作, 1741 年)